
真理と俺。

KOF

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真理と俺。

【Zコード】

Z0981Z

【作者名】

KOF

【あらすじ】

自称普通の高校一年生、本多識織。彼が現在在住している東京都、と日本各地では自殺が多発していた。そんな中、識織少年は、向こう隣りのアパートに住む美人ねーちゃんの自殺を目撃してしまい。超能力や魔術といったものが、ひそかに跋扈する世界に、一人の少年が巻き込まれる小説。ナイフ戦闘に憧れての、異能バトル系モダンファンタジーです。

プロローグ

「ねえ、神様って、いるの？」

少しだけ昔、一人の少女が父親に聞いた。
それは、どれだけの人間が疑問に思ったことか。その少女もまた、
その多くの人間の一人だった。
しかし、父親は、何も躊躇わずに答えたのだった。

「いるさ。お父さんは、信じているから」

信じじるといふと、神はあらわれるんだよ。
少女の頭を撫でながら、父親は微笑んだ。
少女は、蒼白なその顔を、父親に向けて、彼と同じように微笑み
ながら、また、問うた。

「じゃあ、わたしのところにも、信じれば、神様はやつてくるかな
あ？」

やってきて、お願い事、叶えて欲しいなあ、と。笑いながら、顔
を伏せた。

それは、不遜すぎる願いなのかもしれない。叶えて欲しいと思う
ことさえ、不遜なのかもしれない。それ以前に、叶う可能性など、
零なのかもしない。

それでも、願わずには、いれなかつた。

「お父さん。神様は、わたしのこと、嫌いなのかな」

「…………、」

白いベッドの上で、静かに涙を零しながら、無力な父に、そう語つた。白い髪も、その涙で濡らしながら、触れれば折れてしまいそうな喉をしゃくづあげながら。

「お父さん、お父さん。わたしは、どうして、」

「神様がお前を嫌いになつても」

私は、お前のことを嫌いになつたりしない。

私が、神になつてやる。

父も、同じく涙を黒い瞳から零しながら、彼女の手を握った。
この一人には眩し過ぎるほど日の光が差し込む白い部屋で、一人はお互い泣きあつた。どちらが、どちらひとつこうわけでもなく、どちらもが、どちらにも、泣いた。

「天の坐」

その、眩し過ぎるほどの部屋に、黒い点がぽつり。
そこからなのかもしけなかつた。

無力な男が、狂い始めたのは。

プロローグ（後書き）

この作品は、作者の偏見によって満ち満ちています。
ご感想、批判、指摘、お待ちしております。

第一話・自殺予兆

二十一世紀もようやく世纪末を迎へ、二十一世紀への期待が膨らむ中。様々な技術が発展し、様々なことが可能になった時代。

それでも、人が住む場所が一新されるわけでもなく、二十世纪から存在するアパートメント住宅。多機能化が図られたとはいっても、所詮はアパート。高級マンションなどと比べるとセキュリティ面でも圧倒的に負け、外面でも完璧に負けた存在だが、安価な家賃は学生が住むにはちょうどいいのだった。

その、都内某所のアパートの一室。

「自殺者が全国で急増、ねえ」

黒髪黒目の中平凡な容姿をした少年、本多識織^{ほんだしきおり}。登校直前なのか、リビング兼寝室で食パンをかじりながら、テレビ画面に映る、今話題のニュースを眺めていた。

「俺なら出来ないがね。そんな恐ろしい」と

そう言つと、バターナイフでバターを掬い取りパンに塗りつけ一口。塗り過ぎたのか、濃厚なバターの味が口いっぱいに広がる。隅に置いてあつたオレンジジュースで口直しをすると、もう一度テレビに視線を移した。

そこには、自殺者の遺書が映し出されていた。それも、生々しい
錆色の染みがある、それらしい封筒に入った。

その文面は短く、端的な言葉しか述べられておらず、一般人が見
ればサイコパスな文書にしか見えない。むしろ、書いた本人以外は
何を言わんとしていたのか分からぬ。

ただ一文、こう書かれているだけなのだから。

『奴が来る』

震えた文字。飛び散った錆色の血液の痕。死亡方法は恐らく、手^リ
首^{ストカット}切断。文書に飛び散った染みの模様は乱雑で、『刃物』ではない
ことは明らかだつた。文書を書いた直後に筆記用具で搔き切つたの
だろうか？

「…………自殺か。味気ない、死に方だな」

そう言つとせつと残りの食パンを口に放り込み、オレンジジュ
ースで流し込むと、横に置いてあつたカバンを持って玄関へと駆け
て行つた。

「いってきます」

と、誰に言つでもなく、アパートの中へと語りかけた。もちろん、
誰からの返事もあるわけも無く、ただただ声が空しく響いただけだ
つた。

靴を履き、玄関を開けると、そこには黒髪ボーニーテールの可愛
い幼馴染の姿が　あるわけもなく、新学年早々の冷たい外気が体
を引き締めた。

眼下には広大な光景が 広がっているわけも無く、アパートの三階、見渡せるのは、向かいの棟の美人ねーちゃんの下着ぐらいである。

いつも通りの光景。いつも通り際どい下着が風に揺れている中、一つだけ、異常な空間があつた。

向かいの美人ねーちゃんが、ベランダの取っ手の部分に足をかけていた。ただ、尋常ではない様子で、何かに追われているような。

そして、目が合つた。口が開く。か細い声で聞こえなかつたが、口の動きで何を言わんとしているのかだけは分かつた。

『た、たすけつ！？』

分かつたが、言い終わる前に彼女は何もない虚空へと体を投げだした。

識織が知るところの彼女は、夜に出勤するどこにでもありふれたただの風俗嬢だつたはずだ。もちろん、基礎体力も『一般』の域を出ない彼女は、絶対に助走なしで、否、もしあつたとしても、識織が住む第一棟と彼女が住む第二棟の間は飛べない。

そして、超能力者でも魔術師でもない彼女を待ち受けるのは、

重力と言ひ名の、当たり前の力である。

次の瞬間、彼女は一瞬の浮遊感を味わつた後、落下が始まり、獸のような声を上げてアスファルトで出来ている駐車場へと落ちて行つた。

そして、不意に、人外染みた声が止んだ。近くにいれば、おそらくは聞こえたであろう果実を潰すような音は、遠く離れた識織の耳には届かなかつた。

ただ、ゆつくりと向かいの駐車場を見下ろすと、そこには、真つ赤で粘着質の液体が、美人ねーちゃんを中心に不気味な魔法陣のような模様を作っていた。

識織はその光景を何も言わずに見つめ、彼女が飛び降りてきた部屋の方に視線を向ける。

そこで、なにか紅い瞳を持つた何かの存在を感じた。それは、識織に見られていると分かるや否や、一瞬でその気配を霧散させ、気配の海である街の方へと消えて行つた。

何が起こっているか、あまり分かつていらない識織だつたが、ここは社会人になるための試練だと思い、通学鞄の中からスマートフォンを取り出し、警察を呼んだ。

「もしもし？ 警察ですか？ たつた今、飛び降り自殺をした女の人がいるんですけど」

東京都某所。明蘭学園高等部。全国でも有数の名門私立学校で、学力もさることながら、運動も全国トップレベル。さながら文武両道を体現している、超の上に超を超えたぐらいの超エリートが通う学校、のはずだ。

そこで疑問が湧き立つのだが、そこは超平凡である本多少年はこの学校に通つていい存在なのか？

いいのである。

「おい、本多。本多さやーん、聞こえてますかー？」

そんな超エリート学校の普通の教室で、自称普通男子、本多識織は自分の机に自前の枕を装備させて毎寝を敢行中。クラスメイトの善意ある挨拶を完璧に無視。

いびきを立てずに礼儀よく就寝中であるのに對し、クラスメイトAは構わず話しかける。

「今日、新学年新学期早々遅れてやつてくるとはどうこう御了見で
『おこませつか？』

そうなのだ。あの後、警察から事情聽取やらなんやらを無駄に長い時間かけて聞かれたわけだ。それもそつだう。通報した最初の

言葉が、『飛び降り自殺』なのだから。

「……おーい。ほいいるぞハゲ。さつわと起きねえと、全部剃っちゃうわ」

「うひせえな……こつちやあ朝から事情聴取やらをされてとてつもなく不機嫌なんですー。あの税金泥棒どもが！ 最近の連続自殺事件で立ってるからヒト調子こいてんじゃねえぞーー！」

「むぎゃーー」と叫びながら天井に向かって怒りをぶつける。クラスメイト全員の視線が集まるが、それを気にせず自前の低反発昼寝用枕にぎちぎちと噛みつく。

周りのクラスメイト達はその発生源が識織だと知ると、「またお前か」と口々に言いつて名々語り合いに耽りだす。

「なに？ お前、また面倒事にエンカウントしたのか？」

クラスメイトA（男子）は、未だに荒れている識織を無視して話題だけを抽出する。まるでスポットの如く、それ以外のものはゴミとでも言わんばかりに、識織の心を無視した。所謂、意趣返しである。

「ん、ああ……向かいの美人ねーちゃんが飛び降り自殺したのを曰撃しちまつた」

「へえん。大変なんだな、お前も」

「俺は、こと聞いてそれだけで終わらせるお前は凄いと思つよ」

話が膨らまねーな、ともう一度低反発枕に顔を埋める識織。

それをクラスメイトAは、「人の不幸で話し膨らませても、面白くねーべ？」と至極まつとうな返答をしてくださった。それはそれでメディアの在り方を全面否定しているような気もするが、まあ、そんなものなのだろう。

「そんで？ お前は大丈夫なのかよ、生の死体を見て」

「……ん、そうだな、」

人の死体を見て、人の死に直面して、動搖しなかったのかと。それを見て、お前は『大丈夫』なのかと。平静を保てているように見えるが、本当はそんなこと無いんじゃないのかと。

「死体ぐらい、なんてことはないわ」

今までよく見てきたからな、と。

低反発枕に顎を当てて、黒板の方をぼーっと見つめながら、何の気なしに、当たり前のように、平然とそう言った。

それに対してクラスメイトAも、「そうか」と答えるだけで。

これ以上、この話は膨らませないほうがいいと判断したことだろうか。もちろん、識織の冗談という可能性も高いし、現実味のない話しだ。

だからこそ、ではないだろうか。

「まあ、お前が大丈夫って言うんだから、大丈夫なんだりう？」

「まあ、俺が大丈夫って言うんだから、大丈夫なんだよ」

そこで新学年最初のホームルームを告げるチャイムが学校全体に

響き渡り、がやがやと生徒たちが各自の席について行く。クラスメイトAも例外ではなく、「じゃあな」と告げると右端の一番先頭の机に向かつた。ちなみに、識織の席は左側の窓際、運動場がよく見える一番後ろの机である。

と、ちょうど一年生からの担任、熟川^{いすかわ}るるるが高性能な身体を見せびらかしながら教室に入ってきた。大和撫子然とした長い黒髪を歩くたびに揺らしながら、その艶めかし胸やら何やらをぼわんぼわんと。

それと同時に学級委員が、「起立」と堅苦しい掛け声を。識織も仕方がなく低反発枕から顔を引き剥がす。

「礼」

「おねがいしまーす」

「着席」

とまあ、普通だ。

「おはよう、みんな。一年生になつてもこのクラスを持てるなんて、嬉しいわ」

とまあ、普通の挨拶をしている孰川を興味なさ気に頬杖を突きながら眺める。相変わらず、男子高校生を挑発しているとしか思えないプロポーションをしている。男子からは欲望に塗れた視線が、女子からは憧れと嫉妬の目線が。

そんな普通以上異常未満の担任は、普通の挨拶をしながら、とあることに触れてきた。

「まあ、ここまで前書きだつたんだが、本多くーん? キミ
キミ、こつになつたらその面倒事エンカウンタ率下がるのかなー?」

「せんせー、それは禁句だと思いまーす」

あはははは、と教室から笑い声が上がる。識織は、やれやれと言つた様子で運動場に視線を移した。

「本多くん、無視はいけないわよ無視は」

だからかつてゐるつもりがこのオバハン、と心中で悪態をつくと、識織はがらつと立ち上がり、「先生」と神妙な声で話しかけてみた。

静まり返る教室の中、るるりは、「じつで、本多くん」と相変わらず悪戯っぽく笑うだけだった。

「俺のエンカウント率なんかより、先生の露出度を減らした方がいいと思います。ビームの[写真部やらが盗撮しているとも限りませんので」

「あー、そつなの？」
与真部副部長、浦島くん？

「はっ！？」

「ここまで簡単に釣ってくれるとは思わなかつたが、どちらにせよ話題は自分から逸れたようなので、識織は悪魔のような笑みを浮かべながら低反発枕が待つ机へと顔面をダイブさせた。

なに」とも、頭を使えば大体の危機は回避できるよつだ。また一つ、教訓を教えてもらつたことに感謝しながら、尊き犠牲になつた浦島くんに向けて、合掌。

放課後。健全な高校生の諸氏であれば、八割方は部活動に精を出していくところだろう。しかし、識織は部活もせず、とある一室に呼び出されていた。

その一室とは、漫画や小説染みた、学校の生徒の中で最高権力を保有する、生徒会室。室内はオレンジ色の夕日が差し込んで、中央にある会議机を幻想的に照らしていた。

そこで、生徒会長である女性と対談中。

「識織くんは、血殺しひどいことだと呪つ?

窓から差し込む夕日に焦げ茶色の肩まで伸ばした髪を煌めかせながら、優雅にそんなことを聞いてくる。

「源先輩。その前になんで俺を呼びだしたのか聞いていいですか?」

識織のそんな問い合わせに対し、源先輩 源終夢みなもむは、くだらなさをつこつと答えた。

「先生方から、あなたが最近流行りの自殺の目撃者になつたからよ。じやなかつたら、平凡なあなたとなんか話しあえしないわよ」

少しだけ心に傷がつく識織。相手が女性なうえに美人なわけだから、ダメージは野郎に言われるより次元が違うレベルで痛いのだ。そんな痛みを識織は覚えながら、彼女の問い合わせについて考えようとしたが、アホらしくなつてやめた。

「自殺つてのは、自分で自分を殺すから自殺つて言つんじゃないですか？ それ以上でも、それ以下でもないんじゃ？」

「もし」

彼女は、識織の答えに対し、まったく物怖じした様子も無く、こう答える。

「もし、死んだその子たちが、誰かに脅されたり、苛められたり、蔑まれたり、差別されたり、追い詰められたりしていても、かしら？」

自殺とは、自分で自分を殺すことだ。これは変わらない。そこにはどんな心境があつたとしても、自殺とはそういうことだ。そこに誰か他人の手が加わった状態のことを他殺といつ。

しかし、終夢が言つたのは、どうなのだろうか？

「それは、」

「社会的には何の制裁も加えられないけど、そうしたことを行つた人間というのは、自殺を促したことと同様よね？ それはつまり、他殺、ということにはならないかしら。そうね、間接的他殺、

とでも呼んでおいたかしら

間接的他殺。直接的他殺とは打って変わって、あまり騒がれない。それは、自殺という大きな隠れ蓑に隠れているからだろう。誰かが自殺者を脅していようが、苛められていようが、蓑まれていようが、差別されていようが、追い詰められていようが、最終的に死ぬのは、自分である。

「つまり、実体の無い殺人といつわけよ。そういう、間接的他殺といつのは」

「けど、やっぱり、直接的他殺、殺人の方が、恐ろしくないですか？」

瞬間。彼女の華奢で細い右腕が物理的にぶれるのを感じた。刹那。両目に突きつけられた人差し指と中指に恐怖を覚えながらも、その右手首をなんとか掴みとった。

「へえ、よく、止めたわね」

「生憎ながら、『眼』がいいんだね」

そう言つと、終夢の手首をぱっと離した。すると、そそくせと後ろに下がつていった。驚くことに、その距離三メートルである。通常の人間が初速度ゼロから一気にあそこまで加速するのは不可能だ。

「それ、何かの『異能』？」

「さあて、どうなんでしょうね。……はは、っていうか、センパイ、『異能』ってなんですかー？」

識織がそう言つと、終夢は面白くなさそうに、「ふーん」と息をつくと、意地の悪い笑みを浮かべるのもやめてしまった。

識織は、彼女のどこに琴線が隠れているのか恐れて、この話を膨らませないようとしたかった。

「やつやつて線引きしているのもいいんだけどね？ 最近の連続自殺事件、あれ、どう考へても『異能』によるモノでしょう？ 私、そつこつ陰湿なの嫌いなのよ」

「先輩。後輩イビリは陰湿じゃな

ヒューバッ！ と彼女の体が消えたかと思うと、次は膝蹴りを放ってきた。まさか、ここまで本格的な攻撃を仕掛けてくるとは思つていなかつた識織は、その圧倒的質量による膝蹴りを、為すすべなく額に喰らつた。

正直なことを言つと、そのスカートの中にある黒い下着に手を奪われていたのだが。

面白じょうとに後ろに吹っ飛んだ識織を、彼女は、「ふん」と鼻を鳴らすだけだった。

「痛いですよ、先輩」

視界がちかちかしているのを感じながら、無意味だと分かつている反論をせずに入れなかつた識織。

「隠し事は『面白くない』わ、識織くん。知つているなら知つていいで、ちゃんと語りえる」とだつてあるのだし

高校生にしては豊かな胸の前（青系のブレザーを押し上げている）で腕を組みながら、額を押さえる識織を見下してそう言ひ。識織は若干揺れる視界にぐらつきながら、よりよろと立ち上がると終夢に視線を向けた。

その焦げ茶色の瞳は、こう語つていた。

『眞実を吐け』

識織は少しだけ迷つてから、意を決したよつに彼女を見つめる。

「『眞理の明眼』つていうんですよ。俺の両眼。言えるのは、それだけです」

先程潰されそうになつた眼に手をやりながら、自重氣味に笑う識織。

それが、彼の異能の名なのだろう。

「ふうん。『異眼』系統ね、珍しいじゃない。能力は？」

「知つてるでしょ？　そういうのは、あんまり教えると自分の命にかかるんですよ。俺、これでも自分の命は大切だと思っている人間ですから」

異能。それは超能力とも呼ばれる代物である。

もちろん、大々的に公になつてゐるわけではないが、知つてゐる者は知つてゐる。知る人ぞ知るを、さらにミステリシリアス化したようなものだつ。

その多くは普通と変わらない生活は、送れない。
精神が、もたないのだ。

だからこそ、こういった一般人である超能力者同士がこうして普

通に顔を突き合わせるのは珍しい。

「へえん。だつたら、私も教えておいてあげるわ。名前だけ、ね

『波動』。そう呟くと、ふらふらと立ちつくす識織を置いて、どこかに去ってしまった。後ろ姿で手を振つて来た。カツコよかつたのが癪だったので、振り返さなかつた識織。

生徒会長、源終夢。

根城である生徒会室から彼女が去ると、部屋全体に張り詰めていた緊張のよつなものがぶつりと切れた。

「なんだよ。あの速さ、素面じりあいですかい」

そう悪態をつくり、識織も彼女を見習つようとしてその場を去つた。

そして、去り際にこんなことを思った。

人を殺したことがない奴なんて、いるのだろうか？

第一話・異能（後書き）

「」感想」「批判」「指摘、お待ちしております。

バイト。一人暮らしである本多少年にとつては奨学金よりも大事な収入源である。

コンビニの店員だが。

そんな生命線であるバイトに五分遅刻してしまった。普段は眞面目な識織は、こう言つことに結構うるさい。これでクビにされたらどうしよう、などと本氣で悩んでいたのだが、店長が寛容な人間なよつで、「大丈夫だよ」の一言でホッと胸を撫で下ろした。

それもこれも、あのバケモノ生徒会長の所為である。

俺の心労に要した精神力を返せ、と口の中で呴いていると、お客様に不気味がられたようだ。

学校が終わるのは午後三時三十五分。バイト開始は四時半。そこから九時まで働く。

時給は九百円。お高め。

こんな優良物件。おつけあわせ簡単に諦められるはずがない。

そんなこんなで、今日も本多少年は快適空間で精をだしている。

バイトが終わり、夜も更け切った初春。適当に先輩や店長に挨拶をして、彼はコンビニを後にした。首には彼女からもらった手編みマフラー　なんかが巻かれているわけも無く、そんな存在も無く、微塵も無く、黒いネックウォーマーが着けられている。

「今日は、金曜だったか。なら、明日は行けるかな？」

コンビニの入口の前で月が浮かぶ空を眺めながら、ビートなく嬉しそうに笑う。

そんな彼が向かうのは、自宅、というわけではなく、コンビニ近くの大型量販店、チープマーケット。とにかく、安いことで有名なスーパー・マーケットだ。

移動方法は、もっぱらバイクである。学校への通学方法もバイクである。というより、どこに行くのもバイクである。まあ、バイクとこう名の原付なのだが。

ヘルメットをかぶり、エンジンを付け、ござ出発。

初春の頬を撫でる風はまだまだ寒く、ネックアーマーを装備していかなければ頬が真っ赤になつていたであろう。

「さみーな、やっぱり。今日は暖かいモン食いたいな~」

そう言いながら原チャリを飛ばす。それでも、まあ、法定速度は超えないが。

そうは言つても、ギリギリのところまでは出すので、かなりの速度となつていた。

そのままどこかに、何かに追突すれば、自分もあっさりと死ねるほどには、十分な速度に達していたのだった。

死。そのキーワードは、ここまで近くに存在している。

日々、人間は、自分は死ないと黙って生きている。いや、それは非日常であつたとしても、簡単に自分が死ぬというイメージは湧かない。

だから、死がない。

死というイメージを出来ない生物は、死がない。死ねない。

しかし、だ。

死、というイメージをしてしまった生物は、自分の死を想像できてしまつた生物は、容易くその身を散らす。

自殺、もそういうことなのだろう。

自分が、自分に殺されるというイメージを、自分でしてしまった瞬間から、もう、『死』へと突き進んでしまつ。

そう。

こんな風に、目の前に飛び出してくる少女のよう。

「ツー？」

その少女もまた、向かいの棟の美人の女性のように、何かから逃げるように車道へと飛び出してきた。

識織は暗がりから突然飛び出してきた少女の金髪を見た瞬間にハンドルを思いつきり左へと切つた。車体は大きく横に傾いで、そのままアスファルトの上を大きく滑つていく。

一刻一刻とバイクがアスファルトの上を滑り、少女の元へと突き進んでいく。

仕方がないな。

バイクが彼女にぶつかる瞬間、その薄皮一枚を隔てて、圧倒的硬度の何かにぶつかったかのよう、「クラッショ音を上げてびたりと止まつた。

「ぐう！？ くそ、大丈夫か！！」

身体の至るところを擦り切り打撲したのか、よろよろと立ち上がる。夕方を想起させるのだが、氣の所為だと思い、左右へ揺れながら金髪の少女の元へ駆けよつた。

「た、たす、けて！！」

そう言いながら識織の身体にしがみついてくる金髪の少女。今度は朝のことを想起させてくる。朝、あの美人ねーちゃんが飛び移ることに成功していたなら、きっとこうなつていたのだろう。

「お、落ち着いて。どうしたの、いきなり飛び出してきて」

「や、奴が、奴が来るのー？ 食べ、られちゃうのーー！」

何を言つているのか、さっぱりだ。いや、相手はこいつで伝える気が無いのだから分からなくて当然か。彼女はただ錯乱したように喚いているだけなのだから。

「食べられるって、何こ？」

未だ暴れる彼女の体を大きく揺さぶり、自分の眼を見させる。そ

うは言つても、今の自分の『眼』は、見ていて楽しいものではないだろうが。

しかし彼女は『眼』のことなどさうでもいいいらしく、その『眼』をしつかり見ていた。

「や、奴は、奴は！！」

ひたり、と。

彼女が飛び出してきた暗がりから、何かの音が聞こえた。しかし、それは物理的な音ではない。頭の中にだけしか響かないような、そんな音だ。

いや、音と表現するのも馬鹿らしいのかもしれない。間違つているというべきか。

住んでいる世界が違う。起源すら違う。根本からして違う。

「バケモノなの！！」

ひたり、と。

彼女が飛び出してきた暗がりから、何かが出てきた。しかし、それは物理的なモノではない。見える人にしか、見せる人にしか見えないような、そんなモノだ。

いや、モノと表現するのも馬鹿らしいのかもしれない。間違つているというべきか。

「化け、物？」

黒い体躯の四足獸、といつても良いのだろうか？

狼のようなその骨格は、しかし歴史上の生物としては、その巨大さは異常である。

三メートルを超すその巨体でありながら、無駄と言つていい所が
まったくないそのしなやかな肢体。

それが、暗がりから二人の前に飛び出してきた。

『アオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンツ！！』

そんな、実体すら『妖しい』狼は、二人にしか聞こえない遠吠えを、二人に向けて放つた。

「なんなんだよオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

識織は叫びながら逃げていた。とても非合理的だが、混乱を吹き飛ばすには最適だ。

走っている次第なのだが、如何せん、一般人であるため、一般人以上の速さは出せないでいた。

「……」で、何から逃げているのか？ など、愚問に思われる。

あの、黒い狼である。しかし理性的に、声を上げぬ」となく、ただただ詰めてくる。

ただ、三メートルという巨体の所為か、狭い路地に入ると走りにくそうにしている。まあ、それでも最後には、壁を碎いてやつてくれるわけなのだが。

「くつそ！ なんだよアレ！ どんな『異能』なんだ！？」

超能力と呼ばれる『異能』がある。それを識織は知っているし、もう分かつてはいるだろうが、彼も『ソッチ』の『異能』は持っている。

その中に、『創造^{クリエイタ}』を称する能力者もいたが、それは『静』だった。その能力者は、効率が悪いと言っていた。

わざわざ『動』の物を創つて、そういう『対象物を殺せ』なんていう設定をプログラミングするより、自分で剣を創つて殺した方が早いからだ、と。

しかし、それは強がりに違いないことは分かつていた。

ここまで状況に正確に対応してくるとなると、一個人の脳ミソではプログラムしきれない。

(知らない『異能』？ ……なら、仕方がないか)

彼の、所有する、世間一般的に言つといひの超能力。

それは、『真理の明眼』である。

簡単に言えば、いや、難しく言つたとしても 全てが分かる『眼』という説明以外は、出来ないだろう。

その瞳を『開眼』することによつて、見たいと思った全ての事象・真理が、見えるし分かる。それがどんなに超越的物理現象であつても、超常的オカルト現象であつても、万物である必要すらなく、そ

彼らの事象が分かり、干渉できる。

空氣であつても、壁のように扱えたり、金髪の少女にしか見えないよつに設定されているモノであつたとしても、見える。

彼の『眼』の前では、神すらも等しい存在となる。

『開眼』と同時に、両瞳が、紅く染まつた。

血のよつこ、夕焼け空のよつこ、ただただ、紅く、染まる。

右眼によつ解析を、左眼によつ干渉を可能とする。

(…………見たこと、ないな)

やはり、生物ではない。機械仕掛け、といつわけでもない。
そして 超能力ですらない。

まつたく新しい、見たことのない、世界の真理の一つ。
解析するのにかなりの時間を要するほどの、複雑な情報を有した、
概念。

そこにプロограмされてゐる命令は、『対象者を追跡すること』
だけだつた。そこには攻撃性は無い。ただ、ストーカーのよつこ、
ストーキングすること。

そして、最深部に 『解析を行つた存在を、殺せ』

「ツー？」

自分で自分の墓穴を掘つた、といつべきか。『真理の明眼』で見る
までも無く、黒い狼の殺氣が膨張する。波形状に繰り出される殺
氣を視覚化して、避けながら前へと突き進む。

(空中に逃げるのは愚策、か 殺るか)

金髪の少女の手首を握っている方とは逆の腕を、一定の速度で振ると、袖からかなり大きめのナイフが飛び出す。柄の部分は黒く、完全なオーダーメイドと思われる、飾りつ気のないナイフ。

それを見た少女の顔が恐怖でくしゃりと歪むのを見て、「このまま走れ！」と大声で叫んだ。それを聞いたのか聞いていないのか、頷いたのか頷かなかつたのか分からぬように震えたまま、路地を走り抜けて行つた。

ほつとする間もなく、振り向きざまに右手に握ったナイフでコマのように回転して斬りつけた。

牙と直接ぶつかり、腕に直接衝撃が駆け抜ける前に、身体を横に滑らせ、ナイフの刃で受け流す。交差するよつになつたそのがら空きの横腹に、銀色の光を鈍く輝かせるナイフを逆手に持ち替え、搔き切らんと振り抜こうとする。

が、黒狼がその攻撃に対し高速で反応し、身体全体を回転させることでナイフの一閃を避けた。それと同時に、回転力を活かした前肢の一撃が、横に難がれた。

殺意が込められた爪の鋭い一撃を、獣のように身を沈めて避けきる。瞬間、識織の両足の筋肉に、力が籠つた。

身体を沈めたまま、ナイフを持った腕だけを夜空に向ける様は、まさに獣。

静から、動までの、ほんの一瞬。

「死ね」

彼の前では、不死にすら、等しく平等に死が『えられる。

生きていな存在にも、存在していない存在にも、平等に死をもたらす。

さらに身体を沈みこませ、冷たいアスファルトに吐息がぶつかるのを感じた次の瞬間、識織の身体が震む。

走り抜ける銀閃。

黒狼は、一度と少年の姿を認識することは無く、全身に幾筋もの線が奔り、白いモヤのようなモノを噴き出し、陽炎のように消え去った。

識織はといふと、額に若干汗を滲ませて、黒狼がいた場所の真後ろにいた。

手に持ったナイフを学生服の袖に仕込み直しながら、今回のことについて考える。

今回のこと、といふのはもちろん、黒い狼に襲われたこともあるが、自殺者が全国で増加していることも含まれている。

「『異能』が関わってんのかよ……。面白くもない」

そこで、身体の力が抜け落ちるのを感じた。戦闘行為自体は、全然消耗していないが、原チャリで身体全体を殴打したのが、今になつて効いてきた。

「あ～あ。体、なまつてんな～」

そう言いながら、はた、と、ある重大なことに気がついた。

「原チャリ……引けた……俺、痛い……原チャリは？」

どうなつたの？ と。

全身から血の気が引くのが分かる。そして、全力で今自分が走つて来た道を駆け抜ける。汗が、どんどん冷めていくのが分かつた。
そして 、

「お、俺の、俺の血と汗と涙と魂の残骸の血晶がアアアツー！」

もちのろんで、大破はしていなかつた。が、ボディの左半分のそこかしこが、へこみ、傷ついていた。
まるで、自分の身体が傷ついたかのように悶え苦しみながら、怨嗟の声を上げる。

「 は、はは、俺の、俺の愛車…………ブチ、殺すッ！！」

「ここで、『これ以上の犠牲者は出さない！ 覚悟しろ黒幕！』と言わるのは流石というべきか、言わないべきか。

頭の中で修繕費を考え、計算しながら、ため息をついた。原チャリに跨り、「カタキ、とつてやるからな」なんてことをつて劳わりながら、チープマーケットへと愛車を進めた。

傷だらけの格好のまま、店内へ。一田散にレジの方へと歩いて行くと、

「とにかく五千円分。量が多いお菓子を用意し」

「こつもの感じですね」

「はい」

結果、そんじょそこらのスーパーとは違う、文字通りチープなマーケット、チープマークエットでは、特大レジ袋五つ分駄菓子が詰め込まれた。その中に、カツブラー・メンの袋が一つ分。

「ありがとうございましたー」

一人暮らしの高校生にはイタイ出費だが、何故か識織はつまつきていた。

もはや、先ほど上げた怨嗟の声など忘れてしまったかのように、スキップでもとりながら自動ドアをくぐる。

そして、原チャリを労つのも忘れて、早々と帰路についた。

第二話・『真理の明眼』（後書き）

「」感想」「批判」「指摘など、お待ちしております。

今は、既に朽ち果てて誰も寄り付かなくなってしまった廃病院。外壁は黒い黴かびが覆い、窓硝子は割れてしまい、もうすぐ取り壊しが決まっている廃病院。

残骸。

数年前までは多くの患者が入院し、大病院ならではの忙しさに溢れた病院で、しかしながらそこには鬱屈とした雰囲気はなく、爽やかな病院、というのがコンセプトの病院だった。

だが。一度の医療ミス。死亡者。

一人の看護婦が、一人の患者のカルテを取り間違え、似たような症状にある患者に、別の治療を施したことによる、拒絶反応およびショック死。

よくある、廃病院になるパターンのやつだ。

そこの、よくある廃病院の一室。

ほかの部屋とは明らかに違う、調度され、黴も落とされた場所がある。

そこに、目に包帯をした白髪の少女と、黒い髪の男性。

「……見つけた。『異眼』」

黒い折り紙を、くしゃっと握りしめ、力を込めた。

その音に反応した白髪の少女は、その方に顔を向け、震える声で呟いた。

「どうしたの、お父さん」

「……なんでもないわ」

かつて、神にその身の全てを懸けて祈りを捧げていた男がいた。

それは、結局誰のためかと問われれば。

男は娘のためだと言い、

他人は紛うこと無き自分のためだと、そう言つだらう。

そして今、男は 悪魔に祈つている。

朝といえば、爽やか、というイメージがある人は、かなり充実した人生を送っている人なのだろう。逆に、眠い、だるい、という人が充実していないというわけではないが、一日に希望が持てている人、と言いたいわけなのだが。

「爽やかな朝だ！」

体に絆創膏やら包帯やらを装着している人間がそう言つと、不気味に思つるのは決して悪いことではないだらう。

「さてはて、どうするかなーー。」

昨日買つたお菓子を心底嬉しそうに眺めていた。

識織は、そのお菓子を自分で食べるつもりなどない。誰か、他人のために駆つたわけである。

これで、数日間は寂しいご飯になるだろうが、彼が目指す目標のためならば、安いものである。

そして、朝ご飯を用意、といつても、トーストを焼くだけだが。ジャムなども用意して、テレビの電源をつけると、どかりとテーブルの前に座りトーストを食べ始めた。

ニュースでは、昨日飛び降り自殺をしたとされる、向かいの美人ねーちゃんのことが報道されていた。

『都内に住む、赤影橙季さん、二十五歳が、先日投身自殺を』

あれは、『自殺』なのか？ と識織は思つ。

昨夜の黒い狼に襲われていた金髪の少女を思い出す。アレは、超能力の産物ではないが、間違いなく『異能』の産物であつた。だから、それは、生徒会長の言うところの、間接的他殺、というやつなのではないだろうか？ と、そんな感情が堂々巡りをする。

「ううん。分からなくなってきた」

『異能』＝超能力と捉えていた識織。しかし、それは改めなればならないようだった。

「…………魔術、か？」

そう。超能力が創りだす事象は、力の塊といえばいいか。もちろん

ん、脳内での事象を発動させるための演算はしなければならないが、それはほとんど無意識下で行われる簡単なモノである。

しかし、あの黒い狼には、明確な理論が適用されていた。

超常的で超越的な理論。不可思議で未解明な、明確な理論。 そう、『術』のようなモノが組まれていた。

1+1のような単純なものから、方程式など複雑なモノまで。だからこそ、発動させる本人の脳容量は関係なく、複雑な命令を出させていたのか。

それらが分かりそうで分からぬ状況で、

「やーめた。どうせ見れば分かるんだし、次はもっとちゃんと見ればいいわけだし」

そう言つて、雑念を振り払うかの如く、ジャムを塗りつけ、トーストを齧つた。

『 都内を中心とする自殺者の人数は、昨年度の一倍に達しており、これは不況によるものとする説や』

ニュースで原稿を読み上げるだけのキャスターをぽんやりと眺めながら、もぐもぐとトーストを咀嚼する。
いつも通り、オレンジジュースで飲みこむと、

「 魔術、か」

そう呟いて、トーストを再度齧つた。

都内某所、孤児院。金が無くて、幸せが無くて、金が無くなつて、幸せが無くなつて生まれるモノがあるといえ、それは、溜め息と不幸と、孤児である。

ひなどり園。都内各所に点在する孤児院の中で、比較的小さな孤児院。

そこに、

「あ！ しきおりにいちゃんだあ！」

「ほんとだ！ おにいちゃん！」

ほんの少しばかりの『異能』を所有している、本多識織が現れた。厚めの黒いパーカーとジーンズ。両手にははち切れんばかりの菓子が入ったレジ袋が握られている。

「うおおー！ なんだこれえ！？」

子供の人数が十人程度のひなどり園であれば、一週間はもつだろう。

識織は、「ちゃんとみんなで分けるんだぞー？」と笑いながらそれを渡すと、騒ぎながら、ひなどり園低年齢層組、一、三人が持つて行つた。

それを微笑みながら見つめていると、識織と歳が近そうな、深い

藍色の髪を持つた少女が近づいてきた。

「識織さん、いつもいつも、すみません」

「いいんだよ。藍華さん。いつもいつも、いつもいつもやつてき
ては、楽しませて遊ばせてもらつてるから」

と、最大級の笑みを向ける。藍華と呼ばれた少女も、それを見て
笑いを零した。

「それにしても、やつぱりこれだけの子供の面倒を見るのは大変だ
わいへ。」

「ふふ。お父さんもお母さんも働いてますから。私が頑張れば、子
供たちが笑ってくれる。それだけで、私、頑張れるんですよ」

彼女は、十六歳。しかし、高校には通つていない。父親と母親が
始めた孤児院をやりくりするために、ここで働いている、といつぐ
きか。

だけど、そんのは全然苦になつてこないらしい、毎回同じよう
な質問を投げかけてくる識織に対し、毎回同じ回答をするのだが。
それも、笑いながら。

「じゃあ、識織さんは、なんでこいつへ？」

しかし、彼女から識織に質問をするとは無かつた。

識織は、なんとなくまだまだ蒼い空を仰ぎ見る。自分は、孤児で
はない。今は、『家庭の事情』で家族とは離縁状態だが。そこには、
彼らと同じ苦しみを味わったから共感できる、という理由はない。

「ん~、ここの子供って、泣かないよね」

「へ? え、あ、はー。転んだりしたら泣きますけど、癪癪を起しありはほとんどしないですね」

「本当は、」

ほとんど闇を置かずこ、

「泣きたいはずなんだよな」

そう、言った。

様々な理由があり、彼らおよび彼女らは親に捨てられた。彼らからしてみれば、自分は何も悪くないといつてのう。

本当は、本当は泣きたいはずなのに、当たり散らかしたいはずなのに、今日も彼らは、笑つ。

「だから、泣かせてあげたい、のかな? 嬉しそうで、泣けるべりい」

俺がここに来るヒトド、少しどもそれに近づくなら、素晴らしくない? と、少し悪戯っぽい笑みを浮かべる。
彼の習慣は、ここ、ひなどり園に遊びに来るヒト。決して、藍華を口説きに来てこるわけではないのだ。

識織は周囲を見回し、「そりやそつか」と呟くと、藍華に、

「あの娘は、エリ?」

「え? と…………いつも通り、あの場所に」

そう言って、藍華が指をさしたのは本館。地域住民とのふれあいの場所。

「仕方がないのは分かっているんですけど

「…………、

仕方がない。やうなのだらう。

じゃ、ちょっと行つてきますよ、と識織は後ろ手に振りながら、本館・ふれあいの場へと足を向けた。
その後ろ姿を眺めながら、溜め息。

「…………はー。いいなあ、イブちゃん、羨ましいよ

切なげに笑みを浮かべると、とぼとぼと子供たちの方へと歩いて行つた。

「お兄さんがあつてきたよー」

がらりー、と勢いよくガラス張りの戸を開くと、ふれあいの場に入る。

周囲にはファンシーな人形や、お城の張りぼて、手作り感溢れる

着ぐるみなど、学芸会に使つよつたものが多く置かれている。

そのファンシーな人形の山の中に、一つだけ生氣を帶びた何かがいる。それは、白い、純白の髪を持ち、色素の薄い瞳を持った、オノナノロ。

まるで人形のように無機質でありながら、そのなまめかしさは人間のソレで、日の光を浴びたことが無いような白過ぎる指で、分厚い本のページをめくっていた。

「イブちゃん。こんにちは」

「…………」

十一歳ほどの少女イブ　園木斎歩。当て字としてイブと読むのだ。

識織は、その少女の前に中腰になると、へりつと笑つて、

「お菓子買つてきたんだけど、一緒に食べない?」

「…………こりん」

識織に視線を向けず、一言で切り捨てた斎歩。

そんな少女の姿に苦笑いを漏らしながらも、頭をぼりつと搔き、再度チャレンジ。

「めげないぞ俺は。イブちゃんが話してくれるまで、諦めない」

「わざわざ諦めの口コロン」

ペラッと、軽い調子で分厚い本のページをめくると、くあつと欠

伸をした。

若干涙が零れた紅い瞳で無音を見ると、面倒臭そうに口を開いた。

「面倒臭いぞ、キサマ。ボクにかまうなと言つてゐるだろ？

十一歳程度の口ぶりとは思えない、大人びたといつより、達觀したように語るのだ。

紅い瞳を、伽藍の洞のように見開いて、ただ、じつと識織のことを見つめていた。なにも感じていないかのようだ。

だが、識織。識織は動じない。

「やだな、イブちゃん。人と話すのをやめちゃうなんて、それすなわち文化を捨てるつてことだよ。人間最大の文化は、対話さ」

「知るか」

「ほら、そつやつて切り捨ててばっかりいるから、君の中にはなにも溜まらないんじやないかい？ 空っぽいつのまゝ、悲しくないか？」

「別に」

「信じるのが、怖いのか？ わかるよ、その気持ちは

「黙れ」

「だけどね、イブちゃん。そのやり方は、よくない。怖いからって、怖いからって逃げてばかりいるのは駄目なんだよ。たまには逃げるのもいいのかもしねだけど、ちゃんと向き合つことだつて、

「五月蠅い」

「大切ななんだよ。きちんと誰かと向き合つ。それが人間にひとつ大事なことなんだ」

「消える」

「君がなにを『見て』しまったのかはわからないけど、それでも、君は戦わなくちゃならないと、俺は思う」

「死ね」

「過去に絶望したのか、未来に絶望したのか、俺にはわからないけど、や。イブちゃん、君には現在いまがあるじゃないか。現在と向き合つていこうぜ」

「嫌だ」

「こんな問答、そんな返答が、およそ一時間続いた。

どちらも譲らず、識織は自分でも笑えるほどの綺麗事を言いまく

り、斎歩はなにも感じないままその全ての綺麗事を拒絶した。

第四話・ひなごと園（後書き）

「」感想」「批判」「指摘など、お待ちしております。

第五話・ひなじつ園（2）（前編）

……まさか、この小説は、バトルと云う皮をかぶった、文学小説なのか？

と疑ひはじけ、考察が多い小説となつております。

第五話・ひなびつ園（2）

「識織さん、どうでしたか？」

と、少しだけ心配そうに尋ねてくる藍華。「どうでしたか？」と聞かれれば、識織としては、「そうでした」としか答えようがないのだが、無理矢理答えを創る識織。

「そうですね、喋つてはくれるんですけど……子供らしくなこと言えば、そうですね」

あのしゃべり方は、十一歳では絶対に獲得し得ないような喋り方。精神が未成熟な小学生には、演技でも不可能に思われる。最近の小学生は大人びているとは言つても、アレはそれ以上だった。

大人びてているというより、達観している。

もう、『見てしまった』かのような、そんな雰囲気。見て、分かつてしまつたからこそ、諦めているような。

「まあ、子供が意地はつて思つていれば、可愛いモンつすよ。逆に微笑ましいといふか、なんといふか」

「やうだと、いいんですけど……」

「やうだ、藍華さん。イブちゃんがひなどり園に来た時の様子、教えてくれませんか？何か、分かるかもしれません」

過去と現在は、絶対に繋がっているはずだ。

急に興味を持ち始めたことだって、それは昔、小耳にはさんだりちらつと見たりしたことで、それが何らかのきっかけを受けて、意識の表面に浮きだしてきたのかもしれない。

あの徹底的なまでに無関心は、人間的に見て、過去に何かあったと思わざるを得ない。

藍華は、少しだけ躊躇った様子を見せて、そして口を開き、動かし始めた。「のですね？」と。

「あんまり、子供たちの過去を掘り起こしたくないので、言いたくないんですけど……」

けど、と、

「あの子がまた、表情を見せてくれるなら」

「ありがとうございます、藍華さん」

定型的に頭を少し下げる識織。

下げた頭を上げながら識織は思つた。この藍華の言葉で分かつたことは、やはり、昔の斎歩は表情を解放していたということ。そして、やはり、過去なにかしらのことがあったということ。

……まあ、このひなどり園にいる子供たちには、それとない過去があるわけだが。斎歩の場合さ、それが特に顕著なのだろう。

「イブちゃんは、比較的年齢が高い時に、このひなどり園に置いて

行かれたんです

「最近?」

「ええ。そうですね、識織さんがここに通うようになる一年前ぐらいでしかね。最初見たときは、いつも二口二口していて、元気な子供だったんですよ。ここに、置いて行かれる直前まで」

それから、といつものだ。

「親は、そんなイブちゃんを化物でも見るような目で見ていたんですね」

「アルビノの所為か」

あの白髪紅眼。なにも、ファンタジーな要素があるわけではなく、脱色でもなく、生まれつき。

先天性白皮症。生まれついて細胞のメラニンが欠乏している病気のこと。そのため、紫外線には特に警戒する必要があり、視覚障害や皮膚癌などを起こしやすくなる。アフリカの南東部では、その体には不思議な力が宿るとされ、臓器や体の一部を狙った殺人が後を絶えない。

だから斎歩は、あの薄暗い部屋でただ一人、分厚い本を読んでいる。

「アフリカ南東部では『神の子』とかって呼ばれているらしいですから。イブちゃんのご両親は熱心なキリスト教徒で、逆に、怖かつたんでしょうね。自分たちが信じるその存在そのものが、目の前に現れるっていうのが」

信じたものは、不明確であるからこそ、信じられる。実物を見て、後悔しないようだ。

それは、アイドル信仰と同じようなものか。代表例で言えば、アイドルの排泄物は卵で云々。盲田の盲信だ。

その後、藍華は少し口ごもって 言った。

「離れるのが嫌で、泣き叫ぶイブちゃんに向かって、父親の方が、こう言つたんです。とても、冷たい目で。『お前に未来なんていんだ』って

一瞬。識織の瞳が死んだように虚ろになると、そのまま悪態を吐いた。

「………… クソ野郎」

「………… それから、涙が止まって、声が止まって。………… まるで、のつぺら坊みたいになつて、立ちつくして いたと思つたら、一人であの部屋に行つたんです」

親にとつて、子供とは何なのか。

神や、仏の教えよりも、軽いものなのか。いるかいなかも分からぬ、不明確な存在よりも軽いといつのか。

子供は、所詮は授かつたモノとしてしか見ることが出来ないのか。自分たちのチカラで産み育てた子供を、他の力で授かつたと形容するには、おかしくないだろうか。

本来ならざ、いつやつて悩む必要などないはずなのに。

理由など、考える必要などないはずだった。理由なんてそんなも

のは、ないのだから。

親が子供を護りたいと思う気持ちは、理由なんて御大層なものはないはずなのだから。

識織とて、今は親と仲違いをして、一人、愛知から東京まで上京してきたわけだが、それでも両親は自分のことを心配しているだろう。……少々厳しい所があり過ぎるのだが。

「持つていたものを失う辛さは、測り知れません。多分、そのことで精神的外傷を負ったんだと思います」

「……本当、識れたモンじゃないですね」

人とは、残酷だ。

残酷を、酷使し過ぎだ。

本当に、わからない生物だ。

第五話・ひなじつ図（2）（後編）

「J感想」J批判」J指摘、お待ちしております。

帰り道。もちろん、ひなぞり園からの帰りである。

午後五時には帰らないと、今度は識織が藍華の面倒になってしまふので、彼は自主的に帰るようにしている。帰る際には大体いつも、『かえらないでー』とか『今日泊つてけばー』とかいう感動的なことを子供たちが言つてくれる。ちなみに、藍華の両親であり、ひなぞり園の経営者である一人は、識織のことを見ついている。

びすがすと、ヘンな音を上げるエンジンを気にしながら、原チャリを押して帰るのは面倒なのでアクセルを回し続ける。

随分とボロくなってしまった相棒。哀愁を漂わせているが、上に乗つかつていてる彼としては、なんとも情けなく感じてしまうその姿。早く修理に出してやろう。

そう決心した。

それから考えるのは、やはり斎歩のことか。

あの伽藍の洞のような瞳に何を抱えているのか。あの全てが消え去つた純白の髪は何を思つているのか。

そして、彼女の親の言葉は、彼女に何をもたらしたのか。何を奪つていったのか。何を殺してしまったのか。何を壊してしまったのか。何を終わらせてしまったのか。

識織は、原チャリのアクセルを若干強く握りしめながら、顔にぶつかる空気に顔をしかめ、自問自答する。

以前だ。以前、識織がまだ中学生だった頃、ある一人の少女を救

えなかつた。彼は、その少女の心の闇に気付くのが遅すぎた。後悔なんてものじやない。悔しさなんてものは生まれなかつた。ただ、憎しみが生まれた。

だからこそ、と言ひてはなんだらう。

識織は、その時の自分と今の自分を。そして、その時の少女との伽藍の洞の少女を重ねてしまつてゐるだけなのかもしない。ただ、似てゐるもので償おうとしているだけなのかもしれない。

この世界に代わりが効くモノなんて、無いのに。
今と過去は、代わりになるわけがないのに。

重ね合わせてしまつてゐるのか。

そう思ひと、少し滑稽な感じもする。だが、だからと言ひて、今更やめることなど出来ない。

伸ばした手は、助けられるまで伸ばす主義だ。

だから、彼は、彼こそが識る必要がある。あの伽藍の洞の少女が、どうしてあんなってしまったのかを。

「考察は、あんまり得意じやないんだけどなあ。だけど、こんなとじりで『眼』に頼るのも、なんだし」

『真理の明眼』を使用すれば、こうこつ、概念系の問題はすぐに分かつてしまつ。まるで、全ての努力を嘲笑つかの如く、この『眼』を使用して、何かを知らうとした瞬間、全ての真理が彼には分かつてしまつ。

だが、それでは駄目だ。それでは、あまりにも意味が無さ過ぎる。

オレンジ色に染まつて行く空のよう、ただ蒼から橙に変わつてしまつだけだ。変わつてしまつだけでは、意味が無さ過ぎる。
進行のプロセスをすつ飛ばして得た何かなど、得る必要などない。

それは誰も幸せにはしないし、不幸にもしない。ただの結果など、誰も必要とはしない。

だからこそ、識織はこの一年。一度も彼女に『真理の明眼』を適用したことは無い。

これは、あの少女の為にやっていることだ。あの少女がまた笑えるようになるには、泣けるようになるにはどうしたらいいのか。それは、識織が異能を使ってわかつたとしても、あの少女が分かっていなければまるで意味がない。

結果として、最終的に、結論的には　あの少女は、自分で自分を助けるしかない。

こちらは、手助けしかできないだろう。

ここで、自問自答。

自問：誰が誰を助けるのか。

自答：識るか。

週末の日曜日。すでに百年は続いているとされる国民的アニメを夕焼けが差し込む部屋の中で眺めていると、ふと、ノスタルジックな気持ちになる。今ではあまり見ないような家族形態。その中で繰

り広げられる、ありふれた日常を少し誇張したストーリー。

国民的、といつのはつまり、あるのが普通という存在だろう。ポテトチップスと同じようなものだ。

それが無いと、何か落ち着かない。それを見ないと、そういう気分にならない。

なにはともあれ、古き良き存在だ。

「ああ、暇だ」

しかし、高校一年生十七歳である本多識織少年にとつては、少し刺激が足りないものだつたらしい。

テレビのリモコンはタッチパネル式。ある程度文明が進化すると、しなくてもいいものまで進化するのが難点だ。いくつかのチャンネルを飛ばし飛ばし見ながら、何かないかなあ、とぼんやり眺めていた識織。

すると、あの連続自殺事件が超常現象を取り扱う番組で放送されていた。

『すると、今回の件はなにか不思議な力が働いていると? 超常現象研究所所長の有賀見先生』

コメディタッチ風に、白衣を着た壮年の男性に語りかける司会者。おそらく、今回の件で視聴率を伸ばそうと試みているらしい。どうせ、番組が終わつた後には『ご遺族の方々に追悼の意を表して』とかなんとか言つておけばいいとでも思つてゐるに違ひない。

質問された壮年男性は、神妙な顔で答える。

『はい。この世界には不可思議な力で満ち満ちていると、私は考えています。そもそも、この世界の現象には全て原因が存在します。その原因にも原因が存在し、さらにその先にも……と続いていきま

す。それが、途中で途切れるわけですね？ そこが、物事の真理と言つもので』

なんだか、結構深いことを言つてゐるような気がしないでもないが、そこまで面倒なことをしなくては、真理はそこら中に転がっている。

といつよつ、『のオカ研の部長のよつた壮年男性、話が逸れ過ぎである。

』 なのですが、『の血殺の共通点。みなさんは知つてゐるでしょうか？』

『錯乱したよつて、何かから逃避するよつて、最後は命を断つといつとひでしようか？』

司会者の男が壮年男性に答える。

壮年男性は、「はい」と頷くと、座つていた机の下から一枚のボードを取り出した。

『ここには私にもわからないのですが、ここに、ある死の概念が存在するとします。それは具体的なものでも、あやふやなものでも構いません。それが死だと悟った時から、ようするに、自分の死期を悟つた時から人間はいくつかの段階を踏むと言われています。これは、元シカゴ大学精神医学部助教授・医学博士のE・キュー・ブラー・ロスという女性が、二百名を超える凜氏患者などのインタビューから、死期を悟つた人間が引き起こす反応とその後の過程を五つの段階に分けて説明した「死ぬ瞬間」という著から引用したものなのですが』

それなら、識織も知つていた。嗜み程度ではあるが、そういう本

には何度も田を通したことがあった。

第一段階として『否認』。

自分が死ぬといつ事実を受け入れられず、否認する」とよって崩壊する自分を保とうとする。

第一段階として『怒り』

否認ではもはや維持できなくなると、憤怒や、羨望、恨みなど、負の感情が第一段階にとつて代わる。

第二段階として『取引』

本能的に分かっている『良いことをすればそれ相応の報酬が得られる』ということを、死の数日前から行う。これは、一種の信仰と同じで、神との取引とされている。

第四段階として『抑鬱』

これには二つのパターンがあり。『反応抑鬱』と『準備抑鬱』と呼ばれる。

『反応抑鬱』は、大きなものを失くしたという喪失感。

『準備抑鬱』は、この世との決別を覚悟するための準備的悲嘆。

第五段階として『受容』

無の境地に達する。感情がほとんどなくなり、一人きりにされたいと望む。

これらの段階で、様々な感情 所謂、生への執着と猛烈な戦いをする。

『受容』に至れば、もう後戻りはできない。
自ら死へと向かっていく。

『その、死の概念が迫つてくるとします。あなたなら、どうしますか?』

『必死で、逃げますかね』

「戦う、かな」

テレビに向かってぼやく識織。

元からの知識も相まって、壮年男性の言いたいことが大体分かつてきたいらしい。

『その逃げている段階で、「死ぬ瞬間」に記されている五つの段階を上っているわけです。下っている、と言つてもいいでしょうか』

死の概念　あの、狼。それが、この言葉に相当する存在になるのだろう。壮年男性はそのことには気づいていないだろうが、ほとんど本質を突いていた。

もしかして、この人は、本当は凄い人なんじやないか？　と、識織は思つてしまつた。

『「受容」の段階に入れば、既に死を受け入れている状態ですから、自ら死へと向かうわけです。それが、自殺となつて今現在、全国で急増していると私は推測します』

『ですが、その死の概念と言つのは、なんなのですか？』

それを聞いたら、何もかもが台無しになるのが分からないのだろうか？　この司会者は。

識織は、今からオカルト派と非オカルト派の醜い言い争いが始まる前に、テレビのチャンネルをさつさと変えてしまった。

移り変わるチャンネルを眺めながら、識織は考える。

迫りくる死に対して、自殺者たちは何を思ったのか。

……まあ、それは人それぞれなので、識織には分からないことだつた。

オレンジ色の夕日が、少し紫色に変わった頃。

識織は面倒臭そうに立ち上がり、キッチンへと向かつた。今日の夕飯は、カツラーメンになりそうだった。

第六話・死ぬ瞬間（後書き）

E・キューブラー・ロス著の「死ぬ瞬間」から引用。
ご感想、批判、指摘、お待ちしております。

第七話・高校生の日常および非常日常

流石に。

流石にあのぼろつちい原チャリで登校するのは憚られたので、久々の自転車での登校となつた。自分が原動力と考えれば、自転車だって原チャリである。

少しだけ下着に染みた汗を乾かすために、服をパタパタさせながら教室に入ると、何か待ち構えたように識織の席の前には、クラスメイトAがいた。

「おっす、クラスメイトA」

氣さくに話しかけた識織。氣さくだが、呼びかける言葉に悪意を感じるしかなかつた。

「なんだよその名称は」

「名前で言つのが、腹立つ

「なにその理不尽!」

「アキラくんのAだよ。それ以外のなんだつていうんだいアキラく
うん

「アキラじゃねえ! 僕の名前は、」

「あ、先生きた。ほら、席つかないと反省文書かせるや」

「なんでお前に反省文を書かせられないといけないんだよー。お前の態度に対して、俺が反省文を書かせてやりたい気分だ！」

「え、なに？ 三文字以内で今の感想を述べよ？」

「なにそれ、どこのにそんな要素があつたんだよー！」

「黙れ。ほら、句読点も含めて、三文字以内だ。百点満点中百点じゃねえか。それに、今の感想を的確に述べている。俺って、もしかして文系なのか？」

「黙れ！」

「はいはい。知ってるか？ テスト用紙には感嘆符を使っちゃいけないんだぜ？ アキラくん

「だから、俺の名前はー。」

「アキラくん。こつまで本多くんの前の席にお邪魔になつてゐる。井上さんが困つてゐるじゃないの」

「先生までつー！？」

味方のいなくなつたクラスメイトAは頭を抱えると、「うわーん！」と叫びながら自分の席へと戻つて行つた。物凄くいじり易いキャラだった。

そんな憐れなクラスメイトAに敬意を表して、合掌。

昼休みと言えばお喋り。

学校内における話題のタネと言えば、友人の行動、先生の行動、昨日のテレビ、恋愛情報等々、多岐に渡る。

その中でも一際注目を浴びるのが、生徒会役員の動向。および観察である。

生徒会役員、総勢五名で構成される、学校内最高権力たちの情報は学校で暇をする生徒たちにとつて格好の餌となるのだ。目立つ人間から搾取される。これは、どんな大きな規模でも小さな規模でも、同じことだ。

「知ってるか、本多」

朝のショートホームルーム活動で踏んだり蹴ったりだったクラスメイトAが、また性懲りもなく識織の前の席に座っていた。識織はと言つと、面倒臭そうに低反発枕に突つ伏しながら、それでもクラスメイトAの話に耳を傾けていた。

「なにをだよアキラくん」

「だからアキラじゃねえって言つてんだろうが」「

「冗長になるから、アキラくん。アキラくんでいいじゃねえか。力ツコいいんだし」

「……わかつた、アキラでいい」

「小説や漫画、およびHロゲでよく使われそうな名前だけな

「却下だア！」

名前でいじる、小学生レベルの言い合いでしている高校生の姿がここにあった。

話を戻す為に、「つたく、俺の名前は」と繋げりとしたクラスメイトAだったが、「アキラくんだろ？ 知ってるって」という識織の相槌でまたも自己紹介が出来なかつた。

「……話を戻すが、知ってるか、本多」

「なにをですかアキラくん」

本多識織という男は、しつこい男だった。

「……金曜日にな、あの生徒会長がとある男子生徒、それも生徒会役員じゃない奴を生徒会室に招き入れたらしい」

どくん、と胸が高鳴つた。しかし、それは期待などの正の感情ではなく、嫌な気分になる方の、高鳴り。まるで、『犯人はお前だ』と言われたような、そんな感じ。

しかし、クラスメイトAはそのことの気が付いていないのか、「その男子生徒はあの鉄壁の生徒会長の恋人なんじゃねえかつて噂されてんだよ」と血塊げに語つている。

(……は?)

識織は呆けた。識織は呆けた。識織は呆けた。
思わず、スリーアングルで呆けた。

(待て、待て待て待てまでまでマテマテマテ。俺が、いつ、生徒会長に、フラグ、をたて、た!)

「いやあ、その男子生徒つていうのがさあ、平凡な容姿らしいんだわ。」（）で、まさかの、生徒会長面食い説が崩れ去ったわけだよ。今まで幾億の男共が、一説には先生の中にも告つた奴がいるらしいんだけど、それら全てを跳ねのけてきた無敵の生徒会長殿がねえ。やっぱり性格なのか？ 男ってのは性格が大事なのか？ 同志よ、年齢＝彼女いない歴の同士よ、俺に教えてくれ

……なんだかとてつもなく勘違いをしているようだが、識識にそんなことを聞いても分かるわけが あつた。

「……話題性が、大事だと思つよ」

「よつゆるて、派手になれつづー」とか

「……いや、今話題的になることだよ、多分」

「ふうん。 そうなのか」

間違つたことは言つていなければ。あの生徒会長の好みは、ズバリ『面白うこと』。人ではない。こと、なのがミソである。

「実は俺、会長みたいな女の子、好みなんだよ。ほら、年上のお姉さん、包容力でいろんなナニを包み込んでくれそудаし」

「……潰されるべ、いろんなナニをな

「ん？ なんか言つたか？」

「いや、お前の夢を壊さないためにも、言わないでおくよ。さあ、

アキラくん。エロゲの主人公の如く、生徒会長源終夢を攻略して来
い」

「だからアキラじゃ！」

「識織くん、ちょっとといいかしら」

ざわつ、ヒ、クラスメイト達の視線が全て、全て識織に向けられた。クラスメイトがクラスメイトに向ける視線ではない。肉食獣が獲物に向ける視線。被害者が加害者に向けるような視線。

あの、完璧で謎多き生徒会長に、何故お前^じときが呼び出されるのだつ！ という視線だ。

妬み辛み好奇心その他諸々の感情が、クラスメイト達全員から向けられていた。

「ここまで人の感情に曝されたのは、恐らく中学生の時以来か。まあ、あのときはたつたの一人から、これ以上の感情をぶつけられたわけなのだが。

それにしても、人の感情というのは、単純というか複雑というか、識織少年にはそこすらも掴めなかつた。掴みたくもない、と言つた方が正しいのかもしねりないが。

「識織くん、ちょっとといいかしら」

「ここで、識織は生徒会長源終夢を完璧なまでに無視していのに気がついた。完璧な生徒会長に対する意趣返しか。しかし、それにしても、識織には生徒会長に意趣返しをするようなことはされていなかつた。それでいたが、しようとは思つては無かつた。なので、ここでは偶発的事故、といつことになるだろ？」

それにしても、生徒会長源終夢が言葉を発するたびに、識織に向けられる感情の威圧感が上がっている気がした。それは気のせいだと信じたい、いや、でも逃げるのはどうかと思つ、本多識織少年だつた。

「識織くん、ちょっと、いいかしら」

少しだけイライラしてきたのか、それとも最初の無視とは違い、今度の無視は故意的なものだと気付いたのか、発せられた言葉がぎくしゃくと強張つていた。

識織としては、これ以上を無視したら公衆の面前で生徒会長源終夢がどんな行動に出るのか興味があつたが、額に青筋が寄つているのを見ると、生徒会室でなにをされるのか分かつたモノではないので、とりあえず返事をすることにした。

「なんでしょうか、源先輩」

ただし、低反発枕に突つ伏したまま、だが。

「ちょっと、いいかしら、本多識織くん」

名前を後回しここしたところを見ると、そろそろ限界か。返事をしたのに、内容的には同じ質問が返つて来たところを見ても、同じだつた。

識織は低反発枕に精一杯の静かな溜め息を漏らした。そして、最近の高校生らしく少しだけファッショソを気にした髪形をぼさぼさと乱してから、勢いよく立ち上がつた。周りからビヨメキが起るのが痛々しい。

「し、識織」

「名字で言つていう、繋がりが深いのか浅いのかよく分からぬ
キャラ設定が崩れてるぜ、アキラくん」

「だから、アキラじゃない……」

シシコニガシヨボクナツテキタトコリで、識織は生徒会長のところに向かつて歩き出した。教室で固まっているクラスメイト達を搔き分けて、教室の出入り口に向かう。教室の外にも明蘭学園の生徒たち（何故か三年生もいる）がいつもでは考えられないくらいにいた。どうせ、生徒会長見たさの野次馬どもである。無視して構わなかつた。

よつやく。ここまで教室の外に出るのが疲れたことは無かつた。
ようやく識織は、額に青筋を浮かべて眼を細めて微笑している生徒会長の下に辿りついた。

「やあ、生徒会長さん。俺に、何か用があるんですか？」

ずいつ、と。生徒会長は彼女の吐息が耳にぶつかるぐらいまでに顔を近づけてきた。そこで女子からの黄色い声と、男子からの野太い罵声が響いた。

その中で、生徒会長は識織だけに聞こえる声量で、ひつ、言つた。

「…………あなた、死ぬ？」

ぞくり、と識織の背筋になにかが奔り抜けた。勿論、被虐的趣味から来る性的快感などではなく、死に対する本能的恐怖が背筋を凍らせたのだ。

このままでは凍らされたまま、するどい膝蹴りで粉微塵に碎かれてしまつ予感がした識織。勿論、精神的な意味でも、肉体的な意味

でも、だ。

識織は、少し凍ついたような声で、空氣をぬるませながら、
声を出した。

「ハイ、生キアツゴザイマス」

「うそ、ぬいじー

第七話・高校生の日常および非日常（後書き）

生徒会つて、絶対に五人なんかじゃやりくりできない。僕は、この一年でそれを実感させていただきました。

え？ それを行うことに何の意味があるのかって？ 意味なんて、あってもなくても、同じこ^{rry}

ご感想ご批判ご指摘など、お待ちしております。

「うん。一度だけ殺すけど、我慢してもらえるかしら本多識織くん」

「生徒会長殿。人間は一度死んでしまつと、生き返ることはできないのです。人は、一回しかない人生を大切に生きるべきだと、ワタクシは考えております下さい」

「生き変えるのだったら、出来るんじやないかしら」

「変わっちゃつたよ！俺、生き変えつたら、あの娘と結婚するんだ……ってしねえよ！」

「あら。死亡フラグを建てて、『立派ね、識織くん。自ら死地へと赴く準備をするだなんて。いいわ、その意氣やよし。存分に生き変えさせてあげるわ。存分にそのフラグを回収なさい』

「だから死にたくないって言つているじゃないですか生徒会長殿！それに自分でフラグは折りました！ つていうか、源先輩つて、死亡フラグとか知つてる人間だったんですね意外！」

「私を舐めないで欲しいものね、識織くん。それぐらい、前世から知つてるわ。私を誰だと思ってるのよ。あなたでは絶対に計り知れない存在よ」

「なんて高貴な存在……ッ！　喋るのすりおこがましいし、田の前にいるのすらおこがましい。いや、実に。なので、俺は帰らせていただきます」

「いただからといっていいわよ、識織くん。こんな冗長な語らいなんて、本当、プロローグですらないのだから。今から本編よ、識織くん。物語の核心へと踏み込もうと思つわ」

……とまあ、本当に無駄な語らいを、五分ほど続けた後、生徒会長源終夢と、一高校一年生本多識織は、会議テーブルを挟んで向かい合いつぶやいて座った。

今は昼休み、明蘭学園の昼休みが他校と較べると長いのだが、それでもたかだか一時間程度。最初の方に三十分ほど食事をしたので、残りは三十分ほど。わざと終わらせてほしいものだった。

「で、きみ、私と別れてバイトに行つたその帰り道、チープマーケットに向かう途中に、また自殺事件に関わり合つたらしいわね。そのトラブル体质。どうか私にも分けてほしいわ。人生が楽しくなりそう」

「あれ？　なんで俺の金曜日の生活がここまで赤裸々に露呈しちゃつてるんだ？　やだ、……恥ずかしい」

いくらなんでも、生徒会長の権限を超えた何かが見え隠れしているとしか思えない。それとも、この面白いことが好きな源終夢という女性は、識織のトラブル体质に^{あやか}崩ろつとして金曜日の彼の動向をストーキングしたとでも言うのか。

それはそれで、別種の怖さを感じた。

「恥ずかしがつて赤面しないで、氣色が悪くて吐き気を催すレベル

だから「

「俺の顔面はそこまで酷くないと思うー 良く見たら中の上ぐらには見えると思うんですけどー!?」

「あ、大丈夫よ。私、男が赤面したのを見たら、大体言つてる台詞だから。今迄に言つた人数も明確に憶えているわ」

何人が犠牲になつたのか、識織としては少しだけ気になつた。自分と同じ気持ちを味わつた人間が、どれくらいいるのか。

「一人よ」

「俺だけじゃねえか!?!」

「良かつたわね、私のハジメテの人になれて。私のハジメテを貰える人間なんて、あなたをおいて他にいないわ」

「エロく言つたら男が喜ぶとか思わないでください! 嬉しくないですからー!」

「だつて、男が赤面したのを見るの、あなたが初めてなんですもの」

「.....、「

それを言われると、男として気持が悪かった。

言われてみれば、男が赤面したのを見るなんて、気色が悪い以外他ない。男の赤面が許されるのは、幼い少年と、イケメン（女顔）だけだ。

「あなたと話していろると、毎日しても冗長になつてしまつわね。煩わしい」

「指摘させていただきますと、語尾につくタクシめを侮蔑する単語で『じやこまじょつか』

「わづね、改善させていただくわ、識織くん」

おほん、と。話を仕切り直すように、場の空気を零にするように、咳払いをする終夢。それを皮きりに、この場の雰囲気が引き継がれた。ビリヤリ、お惚けフューズはじばりく身を潜めるようだつた。

「識織くん、そこで、金髪の少女を助けたそうね。自分の愛車を犠牲にしてまで。迫るバケモノから、間違いなく不審者と思われるナイフを取り出してまで」

「…………」

そういう武勇伝的なものは、脚色されたくはないと思つていた識織だったが、ここまで本当のことをしつけ言われると、心が傷つく。武勇伝的なものは、脚色されてこそ武勇伝的なものなんだと、改めて認識させられた。

……まあ、今の話で、大体の全容は掴めてきたわけだが。

「入ってきていいわよ、風莉」

「……はい、終夢様」

識織が何に驚いたかといふと、彼が入ってきた別口のドアから入つて来た、先日助けた金髪の少女ではなく、高校生同士で様付けの

関係をリアルに見れたということだった。絶滅する以前から、存在していないと思っていた識織だが、これに対しても認識を改めなければならぬようだった。

その別口から入つて来た金髪の少女は、此処、明蘭学園の制服を着ていた。そして、名札も校章も着けている。どうやら、生徒会長が不可思議な権力を使って入手した制服を着ている というわけではないようだつた。

「先日は助けていただき、ありがとうございます。本多識織先輩」

「えつと……どういたしまして？」

終夢が言つた、『風莉』といつ言葉と、名札の『白鷗』という単語を合わせて、白船風莉というのだろうか。

それにして、この学校に染髪をした生徒がいるとは意外だつたところべきか。この天下の進学校に。しかし、この学校にいるといふことは、ようするに、頭脳明晰または身体能力抜群のどちらかが備えられているというわけだ。

……お世辞にも、それは見えない体つき。および顔つきだつた。いや、ここは人は見た目で判断するべからずという先人からの知恵を遵守すべきなのか。それとも、客観的感想をそのまま適用すべきなのか、悩むところだつた。

「なんで疑問形なのよ、識織くん。女の子を助けたんなら、もっと堂々としていなさいな」

「じやあ」

「じや顔はしなくていいわ。返つてだらしなく見えるだけだから。

まあ、返らなくてもだらしないんだけど

「どうが！？」

「人の前で、簡単に『異能』を使っちゃうとか、ナイフを使っちゃうとか、かしら。能力者としては致命的ね、識織くん。自ら一般人と思しき人間の前で不可思議な現象を起こし、更にナイフまで持ち出すなんて」

「…………」

言われるたびに、識織には言い逃れができなくなつていった。能力者が日常生活を送るにあたつて注意すべき点はいくつかあるが、その中の代表例として一番に挙げられるのは、無闇に能力を人前で使わない、だろうか。

識織はその上、ナイフまで持ち出してしまった。もはや、彼女からは識織のことが一般人には見えないだろ。銃刀法違法違反上に、ミコータントである可能性すら見せつけられているのだ。

「まあ、そのことに關しては気にしないでいいわよ、識織くん」

「へ？」

「その娘、能力者だから」

「……へえ」

「……ひ」

た。

「この学校は、どうやら『異能』を持った人間が多いらしい。自分、本多識織に始まり、田の前の生徒会長・源終夢、『創造』、そして風莉。

ここまでくると、偶然で済ませては、偶然の定義があやふやになつてしまつ。

終夢は、くすくすと笑つと言葉をつなげた。

「能力者といつても、ほんの微弱なものよ。あなたの『真理の明眼』や、私の『波動』とか、あなたが入学当時命懸けで戦わざるを得なかつた『創造』なんかを相手にしたら、数瞬ともたないわ」

識織の能力だつて、本来、戦闘向きではない。識織の戦闘力は、識織の戦闘力だ。能力による付加価値は利用するが、基本的に戦闘には向いていないのだ。

というより、能力が戦闘向き、戦闘専用のような能力など、あまりないのではないか。識織が入学当初戦つた『創造』だつて、本来の使用用途は字面そのまま、創造する能力だ。その中で応用してこそ、戦闘能力を發揮する。

「あ、あの、あたしは、その……」

「私の従順なる下僕よ、識織くん」

「……はい？」

素つ頓狂な声をあげたのは、もちろん本多識織少年だ。

高校生同士で、下僕やなんやら言われても、まったくもつて要領を得ないだけなのだ。

「……あのぉ、今、なんと？」

「IJの娘は、私の従順なる下僕よ、識織くん。だから、先日のこと
は私からも礼を言わせてもらひうわ。ありがとつ、識織くん」

IJの女は、高校生にして既に下僕を所有しているというのか。
人類史上何度目かになる快挙ではないだろうか、と識織は汗を垂
らす。なんだか、こういうことだつたら先人の偉人達がやつていてそ
うな気もしたので、少しだけ氣弱だつた。

「まあ、IJのお礼云々のことば、後田ゆづくつねつとつせてもら
うとするわ」

「なにをするつもりなのが男子高校生としては激しく氣になるとい
うかなんといつか」

なんでもなかつた。

おほん、と。終夢は本題の本題に入るために咳払いを一つ。しか
し、もう空氣はあまり締まらない。ふざけ過ぎたといつ、代償だ。

「まあ、今からの議題は、少しつザケタ感じにぶつとんでこるから、
あまり愚まらなくてもいいわね」

「その議題とは、ずばりなんですか？」

「私が、レズだといつ」とよ

「…………」

ツツ「まない。絶対にだ。

そつ、心に堅く誓つた識織。

「ああ、間違つたわ。魔術師と超能力者の目的についてだつたわ」

……これは、ツッコむべきなのか、悩みどころが多い、ボケかどうかも分からぬ、なにかだった。

第八話・議題その一（後書き）

「」感想」「批判」「指摘など、お待ちしております。

第九話・議題その一

時計の針は既に午後一時三十五分を指しており、いよいよ昼休みも十五分となっていた。識織の当初の望みとなっていた、早く話を終わらせてほしい、というのは、今から本題が始まるとなると、無理な相談らしい。

「これはね、識織くん。本当にぶつ飛んだお話なんだけどね？ 話半分ぐらいに聞いていたらちよづどいいぐらいの、お話だから。だけど、だけど識織くん。これは、私達にとって、とても切実で、とても身近なお話だから、識織くん。フザケズには、聞いてほしいわね」

との、生徒会長からの長つたらしい前置きを拝聴させていただいた後、識織は言葉通り話半分に受け取るつもりになつた。

「魔術師と超能力者の違ひって、なんだと思つ？」

「その前に、なんで魔術師のことを先輩が知つてているのか……つていつも「//」はやめておきますはい」

話の邪魔をするな、とつ言葉がそのまま入念に混ぜられた聖顔で見つめられたので、今回は引き下がることにしたらしい。
それを見て終夢は、「よろしく」と満足げに頷く。

「ああ、なんだと思つ？」

「……チカラの、使い方とかですか？」

「それも正解かしら。使つている生命力は一緒だし、まあ、ハズレじゃないわ。だけどね、識織くん。そんなことは、小さな区別よ」

終夢が横に控えていた風莉に視線だけを向けると、「風莉、あなたはどう考える？」と淡々と尋ねた。

彼女はその問いに、少しだけ天井を仰ぎ見てから、答えた。

「……チカラに対する渴望の有無、でしようか」

「正解よ、よくできたわね。あとで『褒美を上げるわ』

その言葉を聞くと、風莉はこの日一番の笑顔で瞳を輝かせながら、「はいっ！ ありがとうございます！」と答えるのだった。

どうやら、今さつき不覚にも入手してしまった、生徒会長はレズ、ところ情報には信憑性があり、なおかつそのお相手は一年生の女子生徒だということが分かった識織。人は見た目によらないといふか、見た目通りといふか、そんな感想だ。

「今ので理解できたかしら、識織くん。魔術師と超能力者の違い」

「ん？ エット……自分から能力を望んだか望んでいないかの違い、ですか？」

「やうね。幼稚に言つと、そんな感じだわ」

Jの女子生徒は、どうやら人をいたぶるのが好きらしい。これも

この後クラスメイトAに教えてあげるべき情報なのだろう。

終夢は、そんなフザケタ（本当に話半分で聞いてもらつて）ると

は思っていない（想像をしている識織には気付かず、真剣な面持ちのまま話を続けた。

「自ら異形になつた者と、事故的に異形になつた者。私たちみたいに身持ちの軽い人間にはわからない話だらうけど、その両者には目的があるとされているわ」

終夢は魅惑的な微笑を浮かべると、一本、右手の人差し指を形の整つた鼻の前に立てるど、まるで試すかのように識織に問うた。

「識織くん。あなた、神様つて信じるかしら？」

「…………は？」

「か・み・さ・ま。ゴッド。ディオ。いろいろな呼称があるけど、ここは神でいいわ」

神。世界各地の伝承に登場し、憧れ、尊敬、進行の対象となる存在で、人知を超えた絶対的存在、超々規模の自然現象を擬人化した存在、人外とも呼べる功績を残した人物など、様々な概念に用いられる単語。

世界各地での信仰状況は違い、唯一性を強調する場合は一神教、多元性を強調する場合は多神教、偏在性を強調する場合汎神論が生まれる。神話的伝承の中で、神は超越的で絶対的な存在であるとともに、人間のような意思を持つとされる。しかし、近代では様々な観点（近代科学の発展、無神論者からの批判）から、そのような神理解は改めるべきだと意見も現れわれている。

「神様って、ゼウスとか、オーディンとか、あまたらすおおみかみ天照大神あまたらすおおみかみとかですか？ ああ、あとヤハウエとかも有名ですしね？ けど、唯一絶

対の神だから、『その名をみだりに口にしてはならない』とかで、二十一世紀の初頭にローマ教皇がなんかお触れを出したとか

意外と博識な識織。そのことを意外に思つたのか、終夢はおろか風莉であり、彼女の横で驚きの表情を見せていた。

「へえ。意外と博識なのね、識織くんは。そこまでオカルトに興味があるのかしら。トストでは、学園始まつて以来の問題児だとされているのに」

「馬鹿だと言いたいならそいつ言えー。」

「馬鹿」

「言わると傷つくなごうすつかり言われた方がなんかいいのは何でだろう……」「…………」

「それが俗に言ひ氣分の問題という奴よ。そんなことに疑問を抱くなんて、識織くん、かなりねちっこい性格してるのね」

「…………？ 神様がどうかしたんですか？ 新興宗教の、ソラ内なら、いつませんよ」

「うやうやしき以上に掛け合には冗長になるだけと感じたのか（今まで充分冗長過ぎるのだが）、話を強制的に戻した。

「ふふ。うやうや、識織くんは無神論者のようね？ なにか神様に嫌なことでもされたのかしら？」

「まあほんのトライブルを引きよせる体质をひとつにかしてほじこです

ね。こんな体質、神様は俺に死ねと言つてゐるよひよしが聞こえませんから」「

「でも

終夢は全てを見透かしたかのような表情で、識識に言ひつ。

「その体質のお陰で、得られたものもあるのじょう?」

その通りだつた。この体質のお陰、というのは何だか癪に障るので、所為で、自分はそれなりの成長は出来てゐると思う。愛知で親におんぶに抱つこの状態に較べると、大分。昔の知人からしてみれば、擦れ違つてもほとんど気付かないぐらい。

その点は、まあ、妥協してもいい所だとは思つ。

「何もしないで、何も起こらないで得たものなんて、そんなもの要らないわよ。ゆつくりでもいいから、自分で近づいていつて、ときには巻き込まれながら得たものじやないと、私は満足できない」

「……そう、ですね」

それは、先日識纖もしてゐた考察だ。

過程も何もすつ飛ばして得たものなんて、正直何の意味も、価値もない。

だが、それはとても御大層なものが、それを選ぶことが簡単ではないのもまた、事実だ。

「……あら?」

そのとき、生徒会長源終夢は、全校生徒の前では絶対に出さない

ような間抜けな声を、確かに発した。

その視線は、生徒会室に取り付けられている、クラシックな振り子時計に向けられていた。それにしても、流石生徒会室。素人勘定でも、あの時計が価値のあるものだと感じる。

現在時刻、午後一時四十五分。

「……あーあ。どうしてくれるのよ、識織くん。本題に微妙に入つて終わっちゃつたじゃない。これは私を焦らしているともいうの？ だとしたら、相当な策士ね」

「先輩がボケなかつたらすぐ終わりそつだつたんですけどねー！」

「え？ ……ボケ？ あらやだ識織くん。私、ボケなんか言つていわよ？」

「え？」

「あなたを傷つけるための、毒舌暴言罵言だもの。別にツツ」「ミを入れてもらう必要は」

「ある！ 僕の尊厳の為にも十分にある！」

「あなたに尊厳があつたとは、驚きだわ。まさか、今日はアルマゲドンでも起るのかしり」

「俺の尊厳の存在は、地球規模の災害を引き起しそうとでも言つのですか！？」

「うん」

「あつやつ肯定しやがった……」

そんなやりとり（主に識織苛め）をしている内に、時間はさう三分経過していた。昼休み後の清掃場所にいく時間も含めれば、一分一秒も惜しい所だ。そんなところは意外と真面目な、識織少年だった。

「じゃあ、識織くん。今日の放課後、また来て頂戴ね」

「え、それは。俺、バイトあるんで」

それを聞いて、終夢は右手の人差指中指を立てた。

「時給一万円でどうでしょ?」

識織は決して低くは無い生徒会室の天井を見上げ、何か思い至ったように頷くと、ポケットに手を突っ込み、愛用のスマートフォンを取り出し、電話帳からある番号にかけた。

「ああ、店長さん。すみません、俺、今日熱出しちゃって……ああ、はい、大丈夫です。明日には、なんとか」

金の欲望には逆らえない、平々凡々な高校一年生、本多識織（ ）であった。

第九話・議題その一（後書き）

説明のターンがしばらく続くのかな？

とにかく、自分の中の世界観を、書きださなければ。

「感想」「批判」「指摘など、お待ちしております。

どんな文明の利器が発達したところで、自分で掃除をするというのは教育上で大事な焦点となる。高校生ともなると、自立一歩手前。自活が可能なレベルまでに育成しなければならない。

そのための、清掃時間。

識織の担当場所は、男子便所（空気清浄機完備及び大理石の床、私立の特権）でモップでぴかぴかと光る床を磨く。

その横で、いつもどおりイライラした様子でクラスメイトAが、「おー本多ー てめえどうこう見て俺の生徒会長を

「まあ話を聞くなよアキラくん」

「言われなくたって聞かねえよー！」

「あ、そう。なら、俺は話さなくていいんだな。ああよかつた、楽チンだ」

「……てめえ、嵌めやがったな

「一本釣り美味しかつたです」

「俺はマグロか！」

「アキラくさんは自分のことをマグロと称するわけだね。どう考えてもサバレベルの回遊魚なの？」

「回遊魚ですらないしアキラですらないー。」

「いいじゃないか、出世魚っぽくて」

「サバは出世魚じゃない。出世魚はスズキだー。」

「コードネームは、アキラ・スズキってね」

「だからアキラじやねえって言つてんだらうがー。お前、アキラアキラ言こ過ぎてアキラって名前がゲシユタルト崩壊おじこんじやねえか」

とまあ、よく声が通るトイレでのボケとシシ ハハの掛け合には、五分ほど続いた。識織だつて普段はツツ ハハだが、クラスメイトAぐらいの相手ではないと、ボケが出来ないのである。ようするに、ただの憂さ晴らしだ。

掃除時間も残りわずかとなつて来たころ、先程までぶんすかと可愛くもないのに怒つっていたクラスメイトAが識織に話を切り出した。

「だめだ。やつぱりビリしても気になるー。なあ、生徒会長とどんな会話してたんだ？ お前に限つて色恋沙汰ではないと思つが」

「それ、失礼だぞ。まあ、アキラくんとするみたいな掛け合いをしてたら、本題に入る前に終わつちまつたよ昼休み。今日の放課後、時給二万円でケリをつけた」

「なんだよそれ。お前はもしかしてセレブなお嬢様方にモテる新型だつたのか？　お前の性能つて実はそこなのか？」

「違うよ。ああ、そう言えばお前マゾだつたよな」

「どうから捏造したんだその情報！　俺は純然たるノーマルだ！」

「自分のこと普通つて言つてる奴ほど普通じゃねえんだよ。しかし、だったらお前に生徒会長のお相手はちと荷が重いな。やめとけ。不可説不可説転分の一の確率で恋人になつたとしてもだ、お前は毎日のように、いや、正確に毎日毎時間毎分毎秒泣かされ続けるだろう。そして、新しい世界は、存外悪くないところだと思えてくるはずだ」

ちなみに、不可説不可説転とは、非実用的な仏教における大数表示のこと。

アラビア数字の累乗に直すと、 $10^{372183838819}$
 $77644441306597687849648128$ 乗のことだ。

用いることは無いが、計算も出来ないほど大きな数を示すことで、悟りの高徳の大きさを表示することに意味を成したようだ。

「……俺の恋愛成就確率つて、悟りを開くことよりも難しいことなのか？」

「残念ながら、……最善の手は尽くしたのですが、やはり」

「ですか……つて、納得できるかボケ！　それに、日常会話のボケの中にそんな「アな大数表示を持ち出してくんじゃねえ！」

「いいじゃないか。また、博識になれたな」

「大学入試でもこれから的生活で役に立たねえような雑学押し込まれても意味ねえんだよ」

「それは聞き捨てならないな。人間ってのは実戦的な勉強よりも大事なものがあるぜ、アキラくん」

「なんだよ、答えてみるよ」

「それは自分で見つけるべきものだ」

「……深、くねえよ！」

「三点リーダー一つ分ぐらいの間で、物事の深い浅いが分かつたついつのつか？」

「三点リーダって何！？」

「これ以上は無意味な争いである。もちろん、識識が一方的にボケまくるのだが。

「まあ、なんだ。また面倒事に巻き込まれそつた気がしてならないんだよ」

「良い方で、今回は面倒事じゃねえかよ」

「ビ!」が？

「全部だよ」

クラスメイトAは柄がついているたわしで男子便器の淵を擦りながら、言った。

「俺と違って、本多。お前にや救いがあるじゃねえかよ」

「……さてね。救いなんてもの、どうせ助かるのは自分だ。自分で自分を助けない限り、いつまでたつても救いなんて訪れないわ」

男子トイレに、重苦しい空気が流れる。いるだけで息苦しくなるような、ある種、毒を孕んだ空気がどこからか流出しているのかと思つぐらに、重苦しい空気が、一人の間に流れる。

識織もクラスメイトAも、どちらも相手の出方を窺つているようで、黙々と清掃に勤しんでいた。

しかし、片や追い詰められたかのような表情。片や行き詰つたかのような表情。

どちらも似てこぬようすで、そこには明確な違いがあった。

思い至つたような顔になつた識織は、モップで床を磨きながら、口を開いた。

「まあ、なんだい。アキラくん。重い空気を流れさせるなら、もうちょっと場所考えよっせ」

「……違いない」

ふつ、と。

張り詰めていた糸はとうとう切れ、ゆくゆくとたわんでいった。

第十話・議論休憩（後書き）

今日は休憩タイム……なのに、女の子が男の娘すら出てこないあります。

「感想」「批判」「指摘」お待ちしております。

夕方の生徒会室というのは、とても不思議な場所だ。いや、生徒会室に限らず、斜陽が差し込む密閉空間というのは、幻想的な空間へと変貌する。

そこに、本多識織と、源終夢、白船風莉の三人が揃っていた。
この学校には他には生徒会役員がいないのだろうかといつほどに、
生徒会長の存在感は抜群だ。

「いらっしゃい、識織くん。そろそろ夏の甲子園の予選で、全校で応援に行くのだけれど、その会議が少しもたつっちゃってね。待たせてすまなかつたわ」

全国でも化物のような身体能力を持つ高校生がごろごろいる明蘭学園。文武両道がモットーの学校。勉強が出来ない奴は、したがつてあり得ないぐらい高性能な身体を保有している。運動が出来ない奴はまた、あり得ないぐらい高性能な頭脳を保有している。

特に、というわけではないが、野球のような広い場所で行われる大会では、大体の場合全校生徒で応援に行くことになる。

そこで、生徒の自主性を重んじる明蘭学園では、その行事の業務を生徒会にほとんど任せている。投げっぱなしである。

その、平常時の行事なども含わせて多大な業務を行っている中、
そこに時間的余裕を創るのは至難の業だ。

そういう点においては、この生徒会長は人外の働きを見せている

「いいですよ。別に、帰つてもなにもする」となくなりましたし」と言つても過言ではない。

「いいですよ。別に、帰つてもなにもする」となくなりましたし

「ふふ。優しいのね、識織くん」

「わつでもないですよ。俺は、結構厳しい奴です

「ふうん。一年生のときからそんな感じね、あなたは、シンデレ、つていうのかしら。男のシンデレは見れたもんじゃな」って副会長の篠崎くんが言つてたけど、案外、そそるものがあるじゃない」

『』のよひに眼を弧にして微笑む終夢。

背筋になにかが奔る識織。

まるで、蛇に睨まれた蛙のよひに、呼吸すらも一時的に止まつてしまつた。それほどの魔性が、あの微笑みにはあつた。

……存外、自分もマゾッ氣があるのかもしれないな、と認識を改める識織だった。

けれどもそれは、この女性に對してだけのよひだ。

ノーマルだった男にマゾッ氣を感じさせると、サディストのハイヒングのよひな女だ。

「まあ、シンデレでは決してないけどな……で？ 先輩、昼間の話の続きとやらをじつじましちよひよ」

「あら、随分と乗り気なのね？ 本当は逃走するかと思つて、いろいろと罠を仕掛けておいたのだけれど

「罠ー？」

「嘘よ。これ以上冗長こじても、またお昼休みの繰り返しだから、遠慮させてもいいわ」

「え、いや、はい……」

それで、またいつかうつしきコリの嵐が始まりますよ。とこきこんだところ、出鼻をくじかれた識織。走りだした瞬間に足を引っ掛けられて、転んだ先がゴキブリホイホイの粘着シートだった感じだ。

「暁の続き、あらすじとか言つてほし〜?」

「いえ、憶えてるんで」

「や。なら、議論に移りましょつか

オレンジ色の夕日に照らされて、田元に深い影が差していくその表情ははつきりとは分からなかつたが、微笑んでいることだけは確かだつた。

「神様つてこののは、どのくらいこころと思つ?」

「どのくらいつて……日本だけでも、数えるのが馬鹿らしくなるくらいこるじゃないですか……あえて言つなら、たくさんつてどこでしょ?」

八百万の神。ギリシア神話の神々。北欧神話の神々。エジプト神話の神々。アステカ神話の神々。中国の神々。道教の神々。ローマ

神話の神々。マヤ神話の神々。その他数々の神話に登場する神と、宗教において主とする神。少数民族の神なんてのも含めると、それだけで一日経つてしまう。

一神教信者とは、論を相反することになるだろうが、それもすなわち事実だ。

人の数だけ思いがあるよ^うに 人の数だけ神がいる。

「正解はね、識織くん。一柱よ」

「……？ 一柱っていうと、ひとりってことですか？」

神の数え方として、柱が挙げられるだろう。

しかし、この場合、この巨大な宇宙を、たった一本の柱が支えているとしても言うのだろうか？

だとしたら、それは、とても危ういバランスの下に成り立っている。そう。地球の環境と大して変り無いではないか。

「……なんだか、多神教信者の方々が、泣きそうな言葉ですね。ゼウスも涙目です」

「ああ、勘違いしないで、識織くん。私が言っているのは、『源点』^{げんてん}のことだから」

「『源点』？」

「そう、『源点』？」

原、ではなく、源。

全ての始まり。全ての起り。

「アカシックレコードとか言わないでしちゃうね、先輩」

「私、フザケズに聞いてほしつて、言ったわよね？」

いきなり、上等な材質の机の中央が陥没する。

ぱりぱらと、粉のよう舞う木屑の向こう側で、生徒会長源終夢『波動』の使い手は、本田何度も微笑みを呈していた。

「サーヴィスサー！」

識織は椅子から立ち上がり、思わず敬礼をする。

「よろしく」

これ以上フザケルのは、命の危険を感じた識織。敬礼をしたまま椅子に着席し、まだ終夢が笑っている（精神的に）のを見て、敬礼を解いた。

「『源点』ところのは、つまり、全ての始まりよ

「けど、それって、カオスとかじゃなかつたですしね？ 何もない空隙くうけきがどーたらーたらで、そこから原初の神々が生まれたとかどうとか」

そういうオカルトに対して無類の知識を誇る識織。じつは知識は、中学一年生時に溜めておくのが基礎である。それを、所謂中二病と言つてしまい。

識織が不思議そうに首を傾いでいると、終夢はおかしそうに笑う。

「識織くん、神様のことあまり信じていないのに、そういう知識ばかりあるのね。けどね、識織くん。無から有が生まれるわけなんて、ないじゃない」

「……まあ、そこは宗教とか信仰のウルトラエナジーでどうにかなつてゐるんじゃ……いえ、すみませんフザケました」

「もう。次フザケたら、七十億の下僕があなたを殺しに行へから、覚悟なさい」

「世界人口！？」

驚きだつた。

まさか、赤子にまで殺されてしまつよつた恨みを買つてしまつなんて。

「神を創つたのは人間だ、なんて、夢の無いことを言つ人間じゃないわよね？」

「……じゃあ、誰なんですか」

それを言おうとした途端に忠告されてしまつて、少しだけ不機嫌になつてしまつた識織。そんな彼を見てくすくす笑うと、「それはね？」と言葉を紡いだ。

「それが『源点』。全ての根源よ」

凛つ！ と言い放たれてしまつた識織。ようするに、世間一般的に知られる神々を創つたのは、その『源点』とやらしさ。

「……宗教臭くなつてきやがつた」

「『源点』は全ての真理という真理を孕んでいる存在だけど、それを出力する装置が無いの。それを一つの出力装置に任せずに、多数の出力端子でその力を發揮していくのよ。よつするに、『源点』はソフトで、『神々』はハードでといひね」

それは随分と高性能なソフトですね、と呆れたように識織。あたりまえよ、と恥ずかしげもなく終夢。未だ出番があつません、と心の中で風莉。

「で？ その『源点』とやらが、魔術師と超能力者の目的とやりとりの関係してくるんですか？」

本題はそこだつたはずだ。

魔術師には魔術師の、超能力者には超能力者の目的。まずは、魔術師と超能力者の本質的な違いから始まって、果てにはこんな宗教染みたぶつ飛んだお話になつてきた。

もしかしたら、これは先輩のお茶目心か？ と若干疑い始めた識織。

声に苛立ちが混じつてしまつていたのは、その所為だらう。

「ふふ、若いわねえ識織くん。けど、余力は来るべきとき取りつておぐべやものよ」

（来たるべきときつてこつだよー）

今である。

終夢もこれ以上からかうのには引け目を感じるのか、おほん、と

話を戻す為の咳払いを一つ。

「『源点』そのものが、どちらにとつても、最終到達目的よ」

「……でも、それって」

矛盾しませんか、昼言ひたことと、と識織が首を傾ぐ。
終夢は『それぞれ』の目的があると言つた。だが、これではどちらもどちらで同じ目的である。

彼女は、それでも不敵に笑う。

「話を最後まで聞きなさい」。そこへ到達するといふ目的自体は同じだけど、そこからは違うわ。ここへ、昼休みに張つておいた伏線が役に立つのだけれど」

「伏線とか言わないでくださいー。なんだか不安になるからー。」

「黙りなさい」

「……はー」

問答無用だった。

とにかく、その伏線とやらがなんのかは、識織には思い出せなかつた。うんうんとうなりながら首を傾けていると、終夢が、「いいわ、もう一回だけ教えてあげる」と救いの手を差し伸べた。

「さて、なんだつたかしら、風莉

「うーん」と話しおれてもうえた白船風莉女史は、ぱあつ！
と畳みの顔になると、「はーー」と元気よく答える。

「チカラに対する渴望の有無ですー。」

「よくできたわね、偉いわ」

夕日に煌めく金の髪を優しげに微笑みながら撫でる終夢。それに対して頬を真っ赤に染めながら、「えへ、えへへ」と笑いが零れる風莉。

微笑ましい風景のはずなのこ、昼間のレズ発言によって、邪な感じに見えてしあうのは氣のせいだらうか。だとしたら、終夢の微笑みが扇情的に見えるのも、きっと氣のせいだらう。

識織は、精神衛生上よろしくない光景を一分ほど眺めさせつけられてしまった。

じつと一人を見んどいて、そのことに気付いたのか風莉が気まづげに、「あ、あのう」と終夢に提言した。

「ああ、悪かつたわね識織くん。つい、ヤツちやうとしたがったわ」

「せめて俺がいない場所でしてくださーー、哀しくなるだけだからーー」

「冗談よ」

悪戯っぽく笑う終夢と、恥ずかしそうにハニカム風莉。

……ああ、ダメだーいつら、とは識織の心の言。

「じゃあ、識織くん。話を戻すんだけど もしも、よ？ もし、誰から勝手に銃を渡されたとしたら、どうする？」

「……混乱しますかね」

「そんな優等生の回答を望んでるわけじゃないわ。もつと、感情的になつて」

識織は、考える。

銃を渡されたからと書いて、ベツビ、元気だと言った感じだ。そこで一般的思考に則つて考えたとするといふと、『怒り』が混乱の次くらいに来るだらうか。

「キレイますね。なんでこんなモン渡してくんだけよ、って」

「じゃあ、手榴弾だつたら？」

「…………、」

それは、別格の問題ではないだらうか。

銃は、別に所有しているだけでは大して興奮もしないだらう。引き金を引きさえしなければ、至つて安全な代物だから。
だが、手榴弾は違う。
もし、手が滑つたら。
もし、誤つて安全ピンを抜いてしまえば。

緊張。興奮。焦燥。

それらのものが入り混じつて、混乱といつより、むしろ狂乱状態に陥る。

それに、銃とは違つて、その破壊の対象の規模が無差別だ。無差別に広範囲だ。

与える被害なんてものは、比ぢやない。

「……同じく、キレますね」

「じゃあ、それが大陸間弾道ミサイルの発射装置だつたら?」

「……それ以上に、キレるかと」

「じゃあ、それが核ミサイルの起爆装置だつたらどうかしら?」

「……」

識織には、その質問に答えることすらできなかつた。

だが、この女が何を言わんとしているのかだけは、理解が出来た。たとえば、銃、たとえば、手榴弾。たとえば、大陸間弾道ミサイル。たとえば、核ミサイル。

そして

「じゃあ、それが『異能^{チカラ}』だったら、どう?」

試すように、そう言った。

第十一話・議題その三（後書き）

みなさんなりぢうしますか？

欲しくもない、望んでもいない、恐ろしきものを『おえりあれてしまつたとき。

みなさんなり、ぢうするでしょ？

「感想」「批判」「指摘」お待ちしております。

第十一話・議題その終

「識織くん。どうかしら?」

時間が、全ての時間が止まってしまったかのように静止していた識織に対して、返答を促す終夢。

あまりにも、衝撃的といつか鮮烈な質問。

強引に、尋ねられた。

それならば、どうするのか。

「普通ですよ。俺は、いろいろ折り合ひをつけて、ちゃんと生きています」

「そうね、私もだし、風莉もね。『創造』^{クリエイト}は、一時期荒れてたけど、今はそれでもないみたいだし、この学園は今のところ大丈夫よ」

いや、『創造』^{クリエイト}が荒れていたのは、そんな理由ではない。というより、荒れていた、なんでものではなかつた。

全てを一から創りだす能力。まるで、創造神かのようじ、次々とこの世界にある物から無い物まで、全てを創りだしていくた。

終夢は、回想に耽っていた識織を呼び戻すために、おほん、と咳払いを一つ。
視点の焦点を、頭の中から向かい合つて座つてこむ終夢に向けます。

「けどね、あなたや私たちのような人間だけじゃないのよ。耐えき

れなくなつて、自壊する人だつている。周りに災害を振り撒く人だつている。そして、見当違ひの復讐を誓つ人だつているわ

「復讐？」

「そり、その『源点』にね

『源点』。全ての起源、全ての根源。始まりから終わりまで、全てを生み出した絶対的な何か。

「それが、超能力者の目的。『源点』を殺し尽くすことよ」

「……でも、俺は

識織は、『真理の明眼』を開眼した時のことを思い出す。たしかに、最初は超能力という存在に戸惑いはしたが、その時の状況が状況だつただけに、流れ流れになつていて。使い方を誤つて、危うく空気に押しつぶされそうになつたこともあつた。だが、この存在を疎んだことなど、ない。

「ええ、わかってるわ。私が挙げたのは、あくまでも一部の超能力者のことだから」

「……先輩は、そんな人に会つたことがあるんですか？」

「あるわ。死んでいるかの」と生きている、とは言い不得て妙。まるで、生きることが生きる目的なんかじゃないかのよつて、なにかを探してたわ」

終夢の表情が、初めて曇る。

見たことを後悔しているのか、それとも思い出して後悔しているのか。どちらにせよ、後の祭りだ。

「まあ、いいわ。次に魔術師の目的なんだけど、こつちは単純明快。人の欲望が如実に表れているわ」

こつまでも曇っているわけにはいかず、しかし咳払いをする気にもなれず、溜め息で涙を流す終夢。

「あと、今から『』とは、今回の連續自殺事件の黒幕のことも当てはまるから」

せりと、今回の一連の事件の黒幕がどのような奴か予言してみせる終夢。

だがしかし、彼女からはやる気が既に消え失せていた。どうやら、昔のことを思い出した際に、全て持つて行かれたみたいだ。それで、彼女が呼んだのだから最後までやる気をもたせてほしいものだ。

『『源点』には、その全ての真理を孕んでいるといつ性質上、そこに辿りつけば、『何が難でも』やりたいよびにできると考えられてるわ』

「……じゃあ、今回の黒幕には何か叶えたいことが在って、それは普通では絶対に叶えられないものだから、その『源点』とやらに辿りつく方法を探してみつけていふんですか？」

「そのために、魔術師としての力を手に入れた。だから、危険なのは変わりないわね」

よつするに、魔術師や超能力者というのは、究極の自己の中という

わけだ。

自分の目的を叶えるためになら、どんな方法も辞さないし、その過程でどんな犠牲が出ようと構わない。超利己主義な、人間。

「最終的にね？　何が言いたいかと言つと

終夢は、変わらず真剣なまなざしを識織へ向ける。

「とくに、気をつけなさい」

夕日もほとんど落ち、薄暗い光が仄かに差し込む生徒会室で、生徒会長源終夢は、そう言った。

第十一話・議題その終（後書き）

短めですね。

ご感想、ご批判、ご指摘、お待ちしております。

第十二話・魔術師『折神式』（前書き）

今回は戦闘です。

いやあ、指が乗ってしまい長くなってしまったw

すっかり宵の闇に包まれてしまった道路を、自転車をいざながら進んでいく識織。

その顔は、すっかりにやついてた。

「一万かー。時給一万、ふつひつひ」

あのあと、議論が終わり、「はいこれ」と終夢から渡された封筒の中には、たしかに福沢諭吉さんが一人鎮座しておられた。ここまで、福沢諭吉を尊敬したことはない。

それにも、あの女。高校生の身にして、いや、人間である身で、一万円をそこまで軽々と渡せる精神、どこから来るのだろうか。

「もしや、生徒会長は御令嬢説は、本当だつたのか？」

それは、生徒会長七不思議のひとつ、『ありえない投資』に基づくものだ。

懐から、福沢諭吉が百人出てきたとか、学校の迎えにリムジンがやってくるだとか、そんなフザケタ噂なのだが、今回のこと少し信憑性が高まつた。

まあ、そんなこんなで、通りの角を曲がると 黒ずくめの格好をした、壯年の男が道路のど真ん中に突つ立つっていた。

識織は不思議に思い、思わずペダルを漕ぐのをやめて、ブレーキをかけた。ゴムが擦れる甲高い音が閑静な通りに響き渡った。

彼は、少し離れたところから男の様子を窺つた。それだけでも通常時であれば無礼極まりない行為なのだが、今は非常時なのかもしない。

「本多識織か」

よく通る、男声だった。低音で、男としては憧れるような、そんな声。

その壯年の男は、この時期にしてはあまり珍しくない、黒いコートで全身を覆っている。

そして、少し経つて、識織は自分がその男に呼ばれたことに気がついた。識織はやつとのこと、このままでは失礼かと思い、自転車から降りて、「はい、そうですけど」と答えた。

「……そうか。安心した」

壯年の男は、懷に手を入れ、何かを探り始める。その所作 자체は普通で、冷静な印象を受ける。が、異常性を感じさせる。

「『真理の明眼』、だつたか？ 貰い受けよ」

「ツー？」

識織は驚愕よりも先に、右腕を一定の速度で振り、仕込んでおいたナイフを構える。鈍い色の金属光沢が、銀色の月明かりに照らされて、ぎらりと光る。

今、この男は『真理の明眼』だと言つた。誰にも、いや、名前だけならいくらかの人間は知つているが、それ以外の人間は知らない

はずだ。教えた人間や、知つてゐる人間を含めて、脅されたからといつてそつそつ情報を漏らすような人間ではないから。

「折神式」

懐から出したのは、黒い折り紙で折られた、四足獸のようなもの。しかしそれは、手の平サイズのもので、決して人に害を及ぼすことが出来るようなものではない。

本来ならば、だが。

識織は間髪いれず、『真理の明眼』を開眼。両瞳が血のように紅く染まり、動くたびに残光の帯を引いていく。ナイフを逆手に持ち替え、威嚇するように男に向かってた。

「あんた、誰だ」

「八重継真。^{やえつぐま}『源点』を求める者だ」

「……魔術師か」

『真理の明眼』が、薄暗い闇に干渉し、識織だけには幾分か明るく見渡せる。

だが、その眼をもつてしても、男のなんたるかが理解できない。

『真理の明眼』の特徴として、複雑であればあるほど、『解析』にかかる時間は長くなり、眼に対する疲労度も上がってしまう。

(なんだ? こいつ……本当に、ヒトか?)

人とは、複雑なようで単純で、単純なようで複雑な生物だ。複雑な紐を解くよつと理解しようとするれば余計な手間がかかり、単純な紐を解くよつと理解しようとするれば難解なパズルを解くより難しく

なる。

だが、時間をかければ、理解できるはずだ。
どんなに難しいパズルでも、コツを掴んでしまえばあつという間に
解けてしまうように、人間だって同じことのはずだ。

しかし、この男は違った。

掴みかけてはするりと逃れていく。そつ、まるで答えが連続して
変わつて行くかのよつ。

(……真理が、ない？)

「さて、本多識織。その両瞳、私が貰い受けよつ」

壮年の男　八重継真は、いくつかの四足獣を模した折り紙を、
宙へと放り投げた。

そして、識織は見た。

その折り紙の表面に記された、膨大な量の情報を、見たこともな
いような形で書かれた、不可思議な文字の羅列。

それが、紅く浮かび上がり、膨張した。

「……生徒会長殿が言つてたことは、大当たり、つてか？」

『とくに、気をつけなさい』と。

生き物のように蠢きながら膨張した黒い折り紙は、どこかで見た
ことのある、黒い狼三頭へと、姿どころか存在を変質させていた。

「我が宿願、果たさせてもらおつ」

その言葉に対しても、識織は、冷や汗を垂らすしかなかつた。

超能力者とは、神に近しい能力の片鱗を、渴望の有無に関わらず押し付けられた人間のことだ。故に、能力を超えた者と呼ばれる。

運動能力でもない。

思考能力でもない。

現代科学で顯せる全ての能力の中に入つてはいきない能力のことだ。

押し付けられた理由など知ることすら出来ず、ただただ爆弾を抱えさせられた人たち。

耐える者。

憤慨する者。

復讐を誓う者。

折り合いをつける者。

生き方は様々だ。

しかし、最近になつてわかつてきたこと　否、気付かれてきたことと言つべきか。

超能力者から『源点』に通じているのではないか、と。

神に近しい能力は、一体誰から押し付けられたのだろうか、と。

全てには原点がある。何の脈絡も無しに起こる事象など一遍たりとも在りはしない。

そう考えるのは、不自然なことではなかつた。

故に今、魔術師と超能力者の間で、小さないじめが起きている。

そして、今。四月十日午後十時三十分。

とある魔術師と、とある超能力者の間で、抗争が起る。

「ツツガアー！」

三頭の巨狼が一直線に進んでくる。

体積的にも真正面から迎え撃つのは愚策と感じたのか、識織は迎え撃つことなく柳のように身体をしならせ、間をすり抜けた。様子見、と言うのが正しいだろう。

この様子だと、八重と名乗った男はまだまだあの折り紙を出していく。この三頭を葬つたとしても、次から次へと出してくるに違いない。そうなれば、消耗戦になってしまいます。

相手の戦力が分からぬ以上、不用意な体力消費は馬鹿のやることだ。

そういう考えていて、巨狼たちがまた識織に襲いかかる。次はタイミングをずらした三連続攻撃。

次は迎撃に転じる。

長く付き合つてやるほど、識織の気は長くない。

この三頭を一気に消し、切り刻み、次の式神とやらを八重が出す前に、捌じ伏せる。

迫りくる三頭に対し、識織はぐつと身体を沈みこませる。吐息が、冷たく冷え切つたアスファルトを柔らかく撫でるのを感じた。

体は鬼。

心は人。

鬼人となりて、敵を討つ。

紅い残光が帯を引く。動きを現わすのは、ただそれだけ。

瞬間。

縦横無尽に駆け巡った紅い残光が、三頭の巨狼を引き裂いた。生理的に嫌悪を感じるような白いモヤを残し、三頭の巨狼はその姿を散らせた。

間髪入れず、識織は反転する。地面に足をつき、加速するベクトルを無理に変え、膝が嫌な悲鳴を上げる。

髪が寒々しい風を浴び、猛然となびく。

振り向いたその先に、八重と名乗った男がいた。

再び、三頭の巨狼を顕現させた状態の。

「クソツッ！」

誤算だった。最初、あの式神を顕現させる時間は、たしかに五秒はあつたはずだ。しかし、今のタイムは一秒にも満たない。じうなれば、懲々バケモノの相手をしてやる必要が無くなつた。

識織は額に汗を滲ませながら、再度猛進してくる三頭の巨狼にナイフの刃を向けると、今度はこちらからも突進した。

黒いアスファルトを踏みしめる足が、やけに重く感じる。

最初に衝突した巨狼の鋭い噛みつきを、体を沈みこませることにより回避。次に押し寄せてきた前肢による殴打を前転宙返りでなんとか避けた。

『ガアー！』

三メートルを超す巨体が正面から突つ込んでくる。しかし、その巨体ゆえに隙間も多い。

識織は、その四肢の間をすり抜けるようにして、前へと進んだ。

巨狼三頭の攻撃をすり抜けた先に待っているのは、がら空きの操縦者。何事にも、根源は存在する。ならば、それを叩き潰してやれば、もしくは奪つてしまえば、それに操られていた事象は停止する。識織は十メートルの距離を一秒で詰める。驚異的なバネを活かした加速に、八重の表情は驚きに曇る。

「終わりだ、元凶！」

「グッ！？」

八重の足を払いのけ、宙に放りだされた腕をとり、そのまま地面に組み伏せる。閑静な通りに、あまり耳にすることは無い肉を打つ音が生々しく響いた。

うつ伏せに組み伏した八重の首筋に、大型のナイフの刃を突きつけた。

「……動くな」

鈍色の刃が、銀色の月明かりに照らされる。その金属光沢が八重の目にも、識織の眼にも入った。

しかし、それでも八重の余裕を持った顔は崩れず、それを『真理の明眼』でも理解することが出来ない識織には焦りの表情が出ていた。

物理的には優勢だが、精神的には劣勢。

「何を以つて動くなど？」

「気をつけるよ。このナイフ、人を斬りつつと思えば何の抵抗感も無しに切れる業物だから、気をつけるよ」

事実を言つてゐる。それなのに、識織は自分で言つた言葉なのに、虚勢にしか聞こえなかつた。心理的に劣つてゐる部分を、なんとかして言葉で埋めようとしているようにしか、聞こえなかつたのだ。

そんな識織の心情を知つてか知らずか、八重は不敵に笑う。

「そのナイフが、どうしたといつのか。それでは、私にまるで届かぬぞ？」

「……試してみるか？」

「やつてみるがいい。本多の血を継ぐ者よ」

「ツー？」

それは、反射的だつた。

曖昧にしか入れていなかつた力を、持てる全力へと変えて、識織は首筋に当てていたナイフを押しこんだ。

ほとんど抵抗は無く、豆腐を斬るといつより、素振りをするかのよつた感覚だつた。

すとん、と。八重の首が転がる。後ろで三頭の巨狼が消え去るのを感じた。

出血が無い、と氣付いた。

「さて、本多識織。何を以つて私に動くなと命じた？」

後ろから。よく通る、男としては若干羨ましきよつた低音の男声が、閑静な通りに響いた。

そこで、理解した。

『真理の明眼』を以つてして、識織が八重の真理をまるで掘めなかつた理由。

転がつた八重の首が、生理的に嫌悪を感じる白いモヤを噴き出し、消滅した。

識織は、人間として、目の前にいた八重継真といつ男を見ていた。それは、一種の洗脳に近いだろう。人の、それも識織特有の思い込みを利用した、心理的トリック。

組み伏せていた、首を失つた頑強な体も、白いモヤを噴き出し消失した。手にあつた人の感触が、まるで嘘のように失われた。

人ではなかつた。

「お前の誤算は、私が巨狼 天狼しか使役出来ぬと思つたことだ。私は、神に仇なす存在全てを式神として顯現させることが出来る」

識織はゆつくりと立ち上がり、『八重継真』という存在を見つめる。三十メートル以上離れた道路の中央に、燁然とした態度で、最初に会つた時と同じように突つ立つていた。

しかし、これが『本物の八重継真』という確証はどこにもない。否、『八重継真』という姓名すら本物かどうかなど、識織にはわからない。

『真理の明眼』を使用しているにも関わらず、だ。

「日本神話などを紐解けば、誰でも知つてゐる八岐大蛇やまたのおおむちに始まり、

人は神を殺している。私は、その伝承を元に魔術を使つているだけだ。ふん。まさか、神を殺す力が人に向かうとは、皮肉なものだな」

問題は無い。識織は自分にそう言い聞かせる。式神とやらの耐久値はほぼゼロに近い。こちらから攻撃を当てればすぐに壊れてしま

う。

だから、問題無い。そう言い聞かせた。

識織は、八重との正中線にナイフを構える。

「あんた、なんで俺を最初から狙わずに、他の奴らに手出してんだよ」

「最初からお前を狙っていたわけではない。超能力者ならば、見つけ次第狙っている」

「狩るって、あんた……」

「超能力者は、『源点』と最も密接な人間だ。誰よりも『源点』を憎んでいる人間が、誰よりも『源点』を望んでいる人間よりも近しいとは、皮肉なものだ」

「俺は、憎んでなんかない」

識織は言つ。

この『真理の明眼』を得られたことは、最終的にプラスに繋がっていると。

「ふん、関係の無い話しだ。普通の超能力者では、『源点』に辿りつく前に回路が焼き切れてしまう。次元の違う存在を出力させるには、それなりのハードが必要なのだよ」

「それが、ようやく見つけた俺ってことかよ」

また、面倒事に巻き込まれた、と。識織は汗が冷える前に拭いながら溜め息をついた。

識織がそう答えると、八重は悪魔のよつた笑みを浮かべる。眼光が、曇つて見えた。

「そうだ、本多識織。だが、若干違うな

八重は右の人差し指と中指を識織に向ける。鋭い刃を向けられたまゝに、彼の体は竦んだ。

「お前の両瞳さえもらえれば、本多識織、お前の命はどうなつてお

い

「…………、」

識織は、無言で答える。

正中線に構えた鈍色のナイフを逆手に持ち替え、突貫の体勢をとる。

「やはりか。本多家の鬼子は、戦闘狂のようだ」

「俺は、平和主義だーー！」

三十メートルの距離を詰めるべく、識織は黒いアスファルトの上を駆けた。

その途中で八重は懷に手を突っ込み、三つの折り紙を取り出す。あの小さな媒体には、いや、あの情報など詰め込む要素などほとんどないような紙切れが形を成したものに、そこの生物以上の情報量が詰め込まれていた。

紅い文字が膨張し、一気に文字の羅列が確かな情報へと変わつて行く。

再び二頭の巨狼が出現する。

識織はそれを見ても、足を止めずに八重のもとに突貫し続ける。

『グルア！』

一頭目の巨狼が唸り声を上げながら襲いかかってくる。だが、相手が攻撃モーションに入る前に一気に加速し、巨狼の巨大な頭蓋骨を毛ごと掴み、その首筋を識織のナイフが切り裂く。

たしかに肉を切り裂く感覚はあつたが、それはふっと消え去ってしまう。体高三メートル以上の巨体が消え、不意に足場を失った識織だったが、猫のように身を翻させ上手く着地する。

しかし、他二頭が既に展開していた。

左右から襲いかかる二つの巨体。腕と牙。二つの凶器が識織めがけて放たれる。

大きく振られた腕を、ほぼ紙一重とも言えるような危うさで避ける。空を切った巨狼の腕がアスファルトに衝突し、礫を飛び散らせる。

そこに獰猛な牙が識織の頭部を噛み碎かんとする。それを体を大きく反らせ、弓なりに曲がり避けたところで、巨狼の頸動脈を搔き切つた。

しかし、その弓なりに曲がった体に、先程避けた腕が再度振るわれる。

体勢が体勢だけに、ナイフでガードするしかなかつた。

アスファルトを碎いた腕の一撃が、ナイフに激突し、識織を地面に叩きつける。

「ぐッフ！？」

思わず呻き声が漏れだした。肺の中の空気が排出され、得体のしない痛みが全身を覆つた。

そこに、獰猛な牙が襲いかかる。

『ガアツ！』

「くそツ！」

押さえつけられている巨狼の腕をナイフで滑らせ、命からがら抜け出した。そこへ、先程の恐ろしいまでに鋭利な牙が喰らい付いた。ずぶり、と。腕に一センチほど牙が刺さつたところで、右手に握ったナイフが巨狼の頭部を真つ二つに両断した。

三頭の巨狼の身体から白いモヤが噴き出す。

「はつ、はつ、はつ！」

先ほどよりも、機動性や攻撃力が上がっている気がした。
多分、それは気のせいではないだろう。

「そら、何を休んでいる？」

再び折り紙が宙へと放られ、また三頭の巨狼へと姿を変える。識織は溜め息を漏らす暇もなく、紅い残光の帶を引きながらその渦中へと突っ込んでいく。

ナイフと両眼に全ての神経を集中させる。

三頭の巨狼の間をすり抜けながら、いかにして最短の道を突き進むのかを見極める。

在りもしない線が奔るのを見た。

いける。

鹿が地面を蹴るように力カツ、と乾いた音を上げながらその三頭と衝突する。

一頭目の強靭な顎を使った噛みつきを、左手を使った掌底で強引

に閉じ、逆手に持つたナイフでその喉元を掻き切る。

噴き出したモヤが識織の身体を覆い隠した。

そのことに、残り一頭の巨狼の動きが鈍る。しかし、状況判断能力は先日の一件すでに実証されている通り、随分と高い。一頭の巨狼は一時の硬直から解かれ、モヤの中心に攻撃を仕掛ける。

が、何もない。

「相変わらず、不思議な気分だ！」

空を駆ける、という表現が最も正しく、そのままの在り方だった。識織は、何もない虚空を駆け、男の元に殺到していた。空気という存在の真理を掴み、干渉する。範囲指定を行うことで、自分が踏みつけた場所の分子を空氣中に固定せしむことでの、虚空を闊歩することが出来る。

一頭の巨狼の頭上を走り去り、識織は八重に凄まじいスピードで迫っていた。

（奴の式神を展開させる速度は一頭あたり〇・五秒程度。……今から展開されたとしても、一頭だけだ。……いける）

識織は今までの様子見から鑑みるに、相手の最大数は三頭と見切った。

額の汗が、通り過ぎていく風に冷え、乾いていく。

これで、終わり。

しかし、八重は自分が窮地に立たされているのにもかかわらず、識織の突貫をあえて許しているかのような余裕の表情を見せていた。

（……待てよ？　）「いつが、連續自殺事件の首謀者ってんなら……マズイ！？」

気付いた時には、既にどちらも射程範囲内。

「甘いな、本多識織」

鈍色の刃が八重の首に届く前に、それは起つた。八重の身体が内から膨張し、全身の骨格が不自然に歪んだかと思うと、またも白いモヤを残し爆散した。

その中に、一目見ただけで、百はあるつかと言ひほどの折り紙が混入されていた。

膨大な量の情報が『真理の明眼』に流れ込み、嫌な疲労感が両眼に蓄積するのを感じながら、識織はたしかに折り紙が膨張し、形を成していくのを目撃した。

瞬間。

百を超える無数の獰猛な顎あきどが、識織の身体に殺到した。

全身からぞろりとした鉄臭い液体が噴き出すのを感じながら、識織は意識が消え去るのを明確に感じ取った。

第十二話・魔術師『折神式』（後書き）

あ、そういうえば、この作品、主人公最強じゃないです。
まあ、タグにないのでお気づきだと思いますが。

「感想」「批判」「指摘」お待ちしております。

第十四話・狐面の少女

百をも超える巨狼の強靭な顎に喰いつかれ、どうりとした紅い液体を体中から垂れ流している識織。血液を失い過ぎたのか、はたまたあまりの激痛で身体が自然に反応しているのか、どちらにせよシヨツク症状を起こし、時折身体を跳ねさせていた。

だが、それだけだ。

陸に打ち上げられた魚のようこ、びくびくと身体を跳ねさせ、浅く胸を上下させるだけ。

「失」

どこからともなく現れた八重は、よく通る声で式神たちに命令を送った。すると、四肢以外の部分に瞞みついていた巨狼が消え去り、四頭のみが残った。

静けさを取り戻した、閑静な通りに、じつじつと、乾いた靴の足音が響いた。

「ふん。最後の最後に気付いたようだが、それならば氣付かなかつた方がよかつたな。絶望的な数字など」

八重は、乾いた音を立てながら、識織に近づく。

手には、不可思議な形をした文字が刻まれた、黒い手袋が着けられている。

指を握りしめ、その手袋の調子を確認する。

「」のままでは、『真理の明眼』も腐敗しかねんからな。その両瞳、
貰い受けたが

四頭の巨狼が識織の身体を抑えつけている中、その中でぼぼ無傷
な状態の頭部。その傍らに、八重はゆっくりと中腰になつた。
ゆっくりと、八重の重厚な手が、識織の閉じられた瞼に向かう。
ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと 確実に。
しばらくの静寂が続き、そして ぐちやり、と水気のある
音が、鳴つた。

八重は、自らの右手を見やる。

否、元自分の右手を。

「なッ！？」

八重は手首から先が切り落とされた自分の腕を、半ば呆然とした
様子で驚きの声を上げた。噴き出る血液に顔を顰めながら。そして、
いつの間にか、識織の四肢に噛みついていた巨狼の首が切り落とさ
れていることに気付き、顔を顰めながら。

伸ばした手の先には 狐面和装の、何かがいた。

「ちッ！」

黒ずくめの男に、一部の赤が纏わりつく。まずは状況を整理しよ
うと、八重は転がっている右手を広い、バックステップでその狐面
和装の何かから距離を取つた。

追撃は仕掛けて来ない。

八重は痛む消え去つた右手首を押さえながら、その狐面和装の何かを観察する。

(体つきからして 女。武器は、脇差か)

脇差といつても、お飾りの脇差などではない。濡れたような刃、その風格。そこら辺の日本刀の数倍の品格を感じるそれは、狐面和装の少女の左手に握られていた。

圧力は、標的であつたはずの本多識織の数倍。手首が落ちるまで斬られたことに気付けなかつたほどの腕前。

「……そつか。お前が、鬼子の……」¹は、退かせてもらおう

「…………、」

狐面の上からでは、正確な表情どころか、感情すら読みとれないが、予想を立てるとするならば、きっとあの狐面の下は 無表情だつただろう。

八重は再び懷に左手を差し入れると、いくつかの式神を放り投げ、そのうちの一頭に跨り、その場を後にした。

「あ、うぐ……」

識織が狐面の少女の後ろで、悲痛なうめき声を漏らす。

狐面の少女は、群青色の和装に飛び散つたまばらな紅い模様を気にした様子もなく、識織の方に歩み寄つた。

近くで中腰になり、識織の手首を掴むと脈を測りだす。

とくんとくん、と規則的だが、今にも消え去りそうな脈にですら、狐面の少女はなんのリアクションもとらなかつた。ただただ事務的

に、識織の生死を確認しているだけだった。

狐面の少女はしばし一考し、少し経つて思い立ったように識織の身体を乱暴ともいえる仕草で掴むと、その線の細い体躯からは考えられないぐらい彼の身体をひょいと右肩に担いだ。

そして、なるべく振動を与えないように配慮しているのか、柔らかな高速移動と表わせばいいのか、流れるように通りを走って行く。

残ったのは、誰のとも判別付かぬ血の海と、それに映る紅い月のみだった。

真理とはなんだろうか、と本多識織は考えたことがあった。辞書などには、どこも偽りの無い、明らかで隠れることの無いというところに重点が置かれている。

だが、宗教的側面で言えば、現象を支配する根本原理、という似ているよりで似ていらない意味合いに変わってしまう。

真理といつも言葉であり、多面性を持っている。

そのころの識織は、そのことにはあまり納得できなかつた。

真理の類義語、真実が、『真実はいつも一つ』という使われ方を

していたからだ。

ならば、それは全て一繋がりなのではないか、とその当時の彼は、ほぼ直感的に考えた。

全ての根源はまったく同じで、それから全ては派生しているのではないか、と。そんなことを、ほんの少しだけ考えた時期が、たしかにあった。

だけどそれは、閑話にすらならない、心理描写の一端で、もう識織の記憶には無いことだった。

断続的な電子音が、識織の意識に触ってきた。ピッピッ、と規則正しい電子音が、意識が浮上するにつれて、どんどんと大きく聞こえてきた。

薬品の香りがする。それも、病院など、医療機関独特の薬品の香りが、鼻腔に充满していた。

次に、体中を火傷したかのような猛烈な痛み。体中をいくつも刺し貫かれたような。

どうやら、病院に運び込まれたらしい。

瞼を開けようとするが、接着剤でもつけられたように開かない。倦怠感も酷く、身体を横に転がそうとしても、ピクリとも動かなかつた。

仕方無く行動するのは諦めて、ゆっくりと意識を集中させる。

(……そつか。たしか、俺、殺されかけたんだつたな)

あれは、どう考えても自分の失態だ。考え不足だ。

少し考えれば普通に気付くはずだつた。あの狼に風莉が襲われているのを確かにこの目ではつきりと確認したはずなのに、それが連續自殺事件に繋がるものだと気づいていたくせに、久々の戦闘の空氣に当たられて、すっかりと失念してしまつていた。

識織は心中で悪態を吐く。

どうやら窓が開いているらしく、心地よい春の風が頬を撫でた。
そういうえば 誰が、俺を助けたんだ? と、傾げない首を気持ちだけ傾かせる。

あの状況。サイズが少し小さくなつていたとはい、一メートル以上の狼が百頭以上いるあの場所から、誰が自分を助けたのだと。

おそらく、一般人では対戦車用ライフルを持つていても、かすり傷一つ負わせることも出来ないだろう。
ならば、誰が。

思い当たる人物で言えば、やはり能力者関係とあと一人。

あの状況で言えば、一頭の巨狼から逃げ回つていた風莉では論外。生徒会長源終夢ならば笑いながら打破しそうだが、笑いながら敵に加勢する可能性すらあるので論外。

『創造』、論外。

能力者関係の人物が全員論外だつたことに、多少の驚きを隠せないのだが、如何せん、一人ツツ『ヨリビ』ろカリアクションすらもとれない身だつた。

残る一人。

心当たりがあるのは、あと一人だけ。

その人物を形容するならば、自分の影だ。いるのが当たり前で、いるのに気がつかない。存在力は永久的なのに、存在感はどこか抜け落ちている。

「あ、あー……なんだ、喋れるのか。てっきり、喉潰されてんのか」と思った

気がつけば、身体全体を苛んでいた痛みも、若干和らいでいた。どうやら、自分が目覚めたのは投薬してからすぐのことだったらしい。

手の平を握つたり開けたりしながら、身体の調子を確かめる。うん、悪い。

痛みが和らいだといつても、どうやら動かなければの話らしい。それもそのはず。体全体を深く噛みつかれたのだから。本来ならば後遺所の一つや二つ残つていそうなものだ。

「助けてくれてありがとな、」

枕元に感じていた一つの気配が完全に消え去った。だが、逆に気配を消し過ぎてどこにいるのか分かりまくってしまう。どうやら、窓から飛び降りて脱出しようとしているらしい。

識織は、それを止めなかつた。

数瞬後には、部屋の中にはっきりと開いていた気配の穴も消え去り、何事も無かつたかのようになつていた。ゆづくつと、瞼をこじ開ける。

狐面が視界いっぱいに広がつていた。

「どうわアツ！？」

卷之三

狐面を被つた少女はぴくりとも動かない。ただ、狐面の目の部分に開いている小さな穴から、じちらの顔を至近距離から見つめていた。

心臓が高鳴る

「いや、仮説を消し過ぎては完全なる騙しで、本当は綺麗に室内の仮説に血の仮説を回譲せりて、部屋の中に留まつていたらし」。

手の込んだ嫌がらせだ。

狐面の内側にぶつかる呼吸音がなんとも艶めかしく感じる。そんな自分の意外性のあるフェチ（呼吸フェチ）に田覚め、識織は若干どぎまきしていた。

それでも、狐面の少女はぴくりとも反応しない。まるで剥製のように。

と、不意に狐面の少女が群青色の和装の胸の中に手を突っ込んだ。和服がはだけて、若干白い肌と、きつく巻いたサラシが目に飛び込

狐面の少女は、和服の中をまさぐるよつにしながら、しづらしくする
と、凛とした様子で黙つたまま白い封筒に入った手紙を突き出し
てきた。

「う、受け取ればいいのか？」

「…………」

狐面の少女は無言で頷く。

識織としては、いや、全男としては、若干はだけた感のままの和服から覗く素肌が物凄くいやらしく感じる。真っ裸より、断然工口く感じてしまう。

識織は、視線は手紙に移し、意識は狐面の少女の素肌に十割残してまま、突き出されている手紙を痛む腕でゆっくりと受け取った。気付けば、伸ばした腕は、包帯とガーゼがしてあった。どうやら、意識を失った後、よほど多くの場所を噛みつかれたらしい。

彼は、受け取った手紙をその場で広げて読もうとしたその瞬間白刃が煌めき、識織の耳たぶを浅く切り裂いて、枕を紅く染めた。何が？

狐面が振った脇差だ。

「ちょ、ちょちょちよ！？ 危ないでしょーが！ 怪我人、それも重体患者の怪我をこれ以上増やして、俺をどつするつもりだテメエ！」

「…………」

無言で、耳たぶのすぐ横につきたてられたままの脇差が、ほんの少し斜めに傾いだ。

ぴつ、と紅くてらべらと輝く液体が、耳たぶから少しだけ溢れだしてきた。

洒落じゃない。

なんでこんなに自分が焦らなければいけないのかよくわからない識織だったが、狐面の少女の忠告通り、今は手紙を開けるのをやめた。

それに満足したのか、狐面の少女はゆっくりと脇差を引き抜き、鞘に納め、和服の帯に差した。

ほつと、胸を撫で下ろす識織だったが、なぜか、また顔が近い。

「な、なんだよ。ベタなこと聞くけど、俺の顔になんかついてんのか？」

「…………あ

「あ？」

「…………お大事に」

そう言つと、今度こそ狐面の少女は、窓から飛び出し（田測ビル四階）華麗に地面に着地した。そして、こちらを振りかえると、礼儀よく一礼してから田にも止まらぬ速さで走り去つて行つた。
どうしたんだろう？　と首を傾いでいると、次の瞬間、勢いよく病室のドアが開かれた。

「ふふ。こんなにちは、識織くん。やつぱり襲われたみたいね」

心理の読めない笑みを零しながら、生徒会長源終夢がそこには立つていた。

「なんでもお見通しですね」

「私も狼に一回襲われたから。まあ、予想できると聞えれば、簡単だつたわね」

「はは。敵いませんね」

「私が学園を卒業するまで、私を超えることを許さないから」

「……普通は、『私を超えて先に行け』みたいなことを言つたじゃない」

「普通？ そんな味氣の無い物、食べさせられたって美味しいもなんともないじゃない」

「普通がコンプレックスの人には謝れ！ 特に俺とか……」

「識織くんの場合は、味氣ないところより、普通にマズそうよね」

「……ワー、イマノハキズツイタナー。キズツキツイデニ、イッカ
イネヨウ。オヤスミナサイ」

顔も声も真っ白になつた識織は、ロボットのような動きで布団を首までかけ、ゆっくりと目を閉じ就寝しようとする。

それを見た終夢は、自分の右手にぶら下げるメロンを見て、わざとらしく残念そうな溜め息をつきながら、まるで識織に語るよひに独り言を零しだす。

「マスクメロン持つてきたんだけど、要らないみたいね。風莉に盛つて、美味しく頂こ」うかしい

識織の身体がぴくんと反応する。

女同士で、女体盛り……だと……？

「あの娘、たしか口移しが好きだったわよね。ほんと、可愛いんだから。ふふふ、笑いが止まらないわ、どうしましょ。ふふふ」

終夢の平坦な笑い声を聞きながら、識織の頭の中は乱氣流の如く渦巻いていた。

彼女の言葉の一つ一つが、
識織の男心を抉っていく。

（べ、最近の若者の性は乱れていたと聞いたが、これほどまでは……我、一生の不覚）

「まあ、いいわ。今度、裸の風莉と一緒に識織くんの家に突撃しちゃうかもしれないけど、そのときは、ゆっくり楽しんでね？ そして、風莉のハジメテを」

「奪つてあげてね？」

「……俺の、必死の防御も、まるで無意味」

うなだれる識織と、平坦に笑う終夢。

そのあと、看護師さんが来て、騒いだことでお叱りを受けてしまった。そして、その時には既に終夢もメロンを置いてどこかに消えてしまい、看護師さんの目が危ない人を見る目になっていたのに気が付き、若干へこんだ。

厳重注意を受けて、また一人になつた病室で、識織は一回だ
悪態を吐いた。

「… クソ」

その後は、ずっと、ずっと窓から空を眺めていた。

第十四話・狐面の少女（後書き）

新キャラ出ました。

期待の超新星、狐面の少女ちゃんです。今後のためにも、~~お前は明~~かしません。

フフ（'（'）フフ

ご感想ご批判、ご指摘、お待ちしております。

「ぐ、あア」

煤けた廃病院に、一人の男の呻き声が響く。

右腕を押さえながら、不可思議な光を発している札のようなものを、そこに押さえつけている。

右手首は、寸分の狂いもなく垂直に斬られていて、肉どころか骨すらも綺麗に両断されていた。その断面からは血は漏れださず、代わりに、札から漏れる不可思議な光と同じようなモヤが零れ落ちていた。

「誤算だつた……毒刀だつたか」

おそらく、刃の場所によつて違う毒が混入するように、特殊な技法で塗りこまれていたのだろう。ひくつく喉と、痺れた四肢の感覚から、麻痺毒のようだ。

運が良かつたのか悪かつたのか。

きっと、あれ以上本多識織に近づいているか、危害を加えようと交戦状態に入つていれば 致死性の毒が刷り込まれた刃の部分で切り裂かれていただろう。

「痛み分けか……」

本多識織とて、いや、本多識織の方が一歩よりも重傷のはずだ。

だが、遅効性の上、延効性もあるようで、一日経つた今でも、止血程度にしか魔術を使うことが出来ないでいた。

二十一世紀目前の、今の医療技術を使用すれば、すぐさま切断された腕を接着させて、今頃には本多識織の『真理の明眼』を手に入れていたところだろう。

だが、彼はそれを絶対にしない。

科学の力を、許さない。

たつた一人の少女の未来も守れなかつた科学の力なんぞに、自分の身を任せることなど出来やしなかつた。

「……作戦を、改める必要がある、か」

全ては、あの狐面の少女の出現が原因だつた。
八重とて、その情報をまったくもつて頭に入れてなかつたわけではない。むしろ、必要以上に詰め込んだ。

本多識織と言う少年の周りで起こつたあらゆる事件を探り、何度もシミュレートをし、二日前の夜、決行に移つたのだ。

だが、あの狐面の少女の存在は、ほぼ今回のことには関わらないだろうと確信していた。

過去の出来事を漁れば、すぐにそこに至る。
だから、作戦対象からは外していたというのに。

「人とは、やはりわからないな。不確定要素が多過ぎる」

少しだけ痺れる舌をゆっくりと動かしながら、独り言をぼやいた。
ひとまずは、作戦の練り直しだつた。

遠隔操作で、彼の少年が入院している病院を崩壊させるという手だつてもあつたが、それはあの女との契約違反になつてしまつ。それだけで、全てが水泡に帰してしまう。

ぶつぶつと呟く八重。

薄暗い廃病院の一室には、確かに彼一人しかいなかつた。だが、もう一つの影が、そこには現れていた。

「……どう?」

「……」

八重の顔の横すぐ近くに顔を持つてきて、耳元でそつと囁きかける。声の質からして女。それも、人を小馬鹿にしたような。服装は、黒いローブ。その下からちらりと見える自然な金髪が、彼女が日本人でないことを示している。

「答えないの?」

「……あと、一、二日もすれば動けるようになる。心配するな」

「きみの心配をしているんじゃないよ。なんでわたしがきみなんかの心配を……。『真理の明眼』のことだよ。あの両目に傷をつけてないだろ? うね?」

「……ああ」

嘘は言つていない。本多識織本人には攻撃を加え、ほぼ瀕死状態にまで追い込みはしたが、どうせ生きているに違いない。それに、この女もそのことを知つている。

「じゃあ、わたしは戻るけど、さつさと『真理の明眼』集めてね? わたしだって、他に集めるものが在るんだから」

「わかつてゐる。お前こそ、失敗するな

「失敗なんかするかよ。きみと違つて、本物だぜ？」

「……」

「傷ついた？ ねえ、傷ついた？ くく、薄っぺらいプライドだな
あ、イエロー・モンキーは」

耳元で大声で笑い声を上げる女に顔を顰めながら、八重は切断された箇所に札を当てつづけていた。

そんな何の反応も示さない八重にからかうのも飽きたのか、溜め息をついて近づけていた顔を離した。そして、忽然と気配を消す。八重は振り返らなかつた。

（あの女など、あの組織など、利用するだけ利用するだけだ。何の思ひ入れもない）

仲間とは思つていなかつた。

誰一人、自分すらも信じてはいない。

ただ、たつた一人を救うことが出来たなら、どうなつたつていい。
だから、一人の男は魔道へと墮ちた。

そのことに、光ある世界を捨てたことに、後悔も未練もありはない。

「あぐべぐべぐべぐべ」

身体が麻痺していた。どうやら、あの刃には麻痺毒が塗りこまれていたみたいだった。それも、血脉すら麻痺しかねないレベルの。なんとか、なんとか唸り声を上げて通りすがりの看護婦さんを呼び止めた後、パニックを起こされて、こっちの方がパニックというツッコミを入れることすら出来ず、彼女が落ち着くまでの三分間、ほぼ無呼吸で無呼吸我慢大会を行うことになった。字が違うのは、間違つではない。

「本多さん！ 病院内ではお静かに！」

「あんたもだろうが！ 危うく死にかけたわ！ なんで看護師なのに患者がもがき苦しんでるときに患者よりも焦っちゃうんだよ！？」

「本多さん！ 病院内ではお静かに！」

「N.P.Cがあんたは！」

なにはともあれ、味方に殺されずに済んだらしい。よもやあの少女に殺されかけるとは。

人生何が起るか分かったものではない。

それよりも、終夢が帰ったことだし、狐面の少女もいないので、ついに渡された手紙を開封することに。期待半分、その他諸々の感情半分。

ぱりつ、と糊づけが剥がれる音。

中には、和紙とそれに達筆な文字で書かれて逆に普通の人には読むことすらできないような文が書かれていた。

だがしかし、識織からしてみれば、中学三年生時までに田が腐るほど見せられたものだった。

「なになに？」

「

『拝啓 新春の候、識織様にはますますご健勝のことと存じ上げます。

このたびは命令も無しに助けてしまい、申し訳ございませんでした。しかし、識織様の命の危機に居ても立つてもいられず、身体が動いてしまいました。すみません。識織様の仕打ちならば、どんなことでも喜んで受けましょう。その場合は、是非、識織様の役に立てる形で。

さて、本題はしばらく横に置いておくことにして、世間話でもいたしましょう。

最近、識織様近辺で『不穏な動き』が見られます。本来ならば、識織様が襲われる前にご報告をすればよかつたのでしょうが、すみません、私の不確かな情報であなたの貴重な思考能力を割くわけにはいかないと想い、心の中に留めて置いた次第でした。これは私の判断不足でした、すみません。そして、識織様が襲われた際も、あなたならあのような団体だけが大きな狼三頭に負けるわけがないと思い楽観視していました。まさか、身体の中から百八頭もの狼が出てくるとは。これはもう、識織様に私の貞操を捧げる程度では済まないと感じている次第でござります。しかし、これからは自らを強化した私が護衛に回りますので、おそらく、対戦車口ケットを撃ちこまれても死ぬことはございません。嗚呼、識織様ならそんな心配は必要ありませんね。重ね重ね、失礼しました。

まだまだ寒さの残る季節ですので、身体には十分のご注意を。』

最後は敬具と、一寧な結びで締められていた。

識織はいろいろと思考がフリーズしていた。とにかく、ツツコミ／＼じりが多いではなく、ツツコミ／＼じりしかない文章だった。

口に出してみることにした。

「まず俺のことを過大評価し過ぎだ。あと惚氣話が所々混じり過ぎだ。そして俺はお前の貞操を奪つつもりはさらさらない。逆に奪われそうで怖い。据え膳食わぬは男の恥？ なにそれ、前時代の遺物でしょ？ 人間なら据え膳食う前にいただきますを言わなくちゃなりません。そして自らを強化つてお前体に何をした。確かに男としては、サイボーグ少女とかに興味が無いわけでもないが、やっぱり何の手も加えられていらない少女の身体をげふんごふんっ！ ますいな、まだ身体に麻痺でも残っていたか」

途中からツツコミではなく、ぼぼ妄想に突入してしまった。

そこから何故か猫耳の重要性やら、スパツツの生存の確認だとか、裸より微妙に服脱いでる方がエロいよなとか、女の子はやっぱり笑顔だよなとか、もう手紙の内容は関係なくなつていた。

そして仕舞つた手紙の裏の隅つこに『殺したいほどに愛していくす』と書いてあることには、全然気付かなかつた。

それからも数日間、終夢が恥じらう風莉を連れてきたり、クラスメイトAが普通の見舞い品を持ってきていじられに来てくれたり、窓の外から狐の纏わりつくような視線を感じたりと、いろいろ忙しかつた。

そして、一週間後、退院。

失う時が、やつてくる。

第十五話・元凶（後書き）

「感想」「批判」「指摘」お待ちしております（＊、＊、＊）

第十六話：『先見の晴眼』

「え？ 今日も大事を取つて休んでいい？ 本当ですか！？ エ、給料も出るから大丈夫？ けど全快したら十分働いてもらひよ？」

識織は思わず突つ伏していた枕から顔を起こし、椅子の背もたれに背筋をぴんと伸ばしてクラスメイトの田も憚らず大きな声で叫ぶ。

「ありがとうござりますーー！」

果てには椅子から立ち上がり、大手の商談が決まった社会の歯車のようにお辞儀をする。もちろん、虚空相手に。

「ええ、ええ。 ありがとうございます。 では、また今度」

スマートフォンを操作し、通話を遮断する。そして、至福の表情でまた低反発枕へと頭からダイブした。ふおおおおおお！ と今世纪最大の興奮を露わにしながら、枕を抱きしめた。

それを、井上さんの席に座ったクラスメイトAが呆れたように眺める。

「お前、一週間ぐらい学校休んだと思つたら体中穴だらけで帰つてくるのな。今度はどんなだけアブナイことに巻き込まれてんだよ」

識織の身体に巻かれた白い包帯と保護ネットに田も向かながら、

やはり呆れたような声を漏らす。

「狼百八頭に噛みつかれた後、仲間の狐面の少女の毒刀によつて呼吸困難を併発、さらに妄想による禁断症状、もう俺の心体はボロボロだぜ」

「最初の以外は絶対にあれだよな。ギャグだよな」

「ギャグ補正のかかつたシリアルスだ。分かるな？」

「お、うん？……いや、ちょっと待てよ？　いや、盛大に待て。ギャグとシリアルスは双極を成す存在。故に！　共存はあり得ないだろうが……」

「どこにツツコミ入れてんだよ。まず狼百八頭に襲われたというところにツツコミを入れるよ。ボケ要員が無茶しやがって」

そんなところで、本多識織高校生は通学用鞄を手に提げ立ち上がる。お前今さつき立ち上がって座つたばかりじゃねえか、というクラスメイトAのツツコミは無視した。

今はコイツの相手をしている場合ではない。

識織が入院していた期間は一週間。

二十一世紀直前の日本には新たな休日が加えられ、ゴールデンウイークがプラチナムウイークスに変化したといつても過言ではない。なにはともあれ、ゆとり世代の肩身がまた狭くなつたわけだった。それはともかく、識織がクラスメイトAをここまで半分無視をしているわけは、一週間ぶりにひなどり園に行きたいわけで、いつも見ている少しイケメンなクラスメイトAの顔なんてどうでもいいわけで、というわけで、さっさと帰りたいわけで。

「じゃあな、アキラくん。わざと生徒会長を攻略してくれ

「……そうだな。なんだか、今回も頑張ってるみたいだし、俺の出番は無いか」

「多分一生ねえよ

「言つたな。絶対助けないからな、絶対だ」

「いや、本気でヤバい時は助けるよ」

そんな掛け合いをして、識織は午前で終わった学校を去った。
ちなみに、このゴールデンウィークの課題の多さは、明蘭学園生徒にとつては地獄のレベルである。ようするに、識織にとつての休暇など　いや、それはどうでもいいことだ。

識織が入院している一週間の間、八重継真が何もしてこなかつた理由。

八重も右手首を切断された上に、強力な麻痺毒を使われて数日間は動けなかつたとはい、識織だつてそれ以上の傷を負わされていた。それも、一週間は看護師の手助けなしにはベッドの上から起き上がれないほどに。

それよりも八重継真は先に回復していた。

ならば何故、八重は何のアクションも識織に起こさなかつたのか、
といふ疑問が当たり前のように降つてくる。

今現在の識織の防御網を越そつとすれば、必ずあの狐面の少女と
ぶつかることになる。

八重が集めている情報の限りでも、その戦闘力は本多識織の遙か
上をいく。

その上、だ。

近日、狐面の少女は日本から姿を消している。どんな古風な方法
で太平洋を渡つたのかは知らないが、旅客機や船舶などではないの
は確かだつた。

そして、近日、東京湾に忍び寄る、海に浮かんだ小型の漂流物が、
式神の中の記録に蓄えられていた。その中から出てくる人影も。

それも含めて、八重の計画の穴だつたわけだが、あの戦闘時、狐
面の少女の登場の仕方に違和感を感じた。

本多識織襲撃計画を発動させた時点での、すでに周囲五十メートル
は巨狼の探知範囲だつたわけだ。イヌ科の動物の聴覚を舐めてはい
けない。その能力を半径五十メートルに絞り込んだのだ。その中で
有用な情報を取捨選択し、八重に送り届けられるようにも設定され
ていたわけだが、まったくそれがなかつた。

そのことが、何を意味するのか？

もちろん、五十メートル先から刹那とも言える速度で八重に迫り、
その手首を切り落とし、立ちはだかつたということになる。

そんなこと、生身の人間では不可能だ。

そこで思い浮かべられるのは 超能力。

そして、渡つた先は、おそらく超大国アメリカ合衆国。

おこなつたことは、容易に想像できる。

近年でも、噂に事欠かないアメリカの超能力開発。そしてこの世界には、超能力者が確かに存在している。

そうなると、もう、あの狐面の少女を突破することは不可能に近い。

五十メートルの距離を刹那よりも速く詰められる、本多識織より戦闘能力の高い人間がいるところなど、もはや核シェルターに籠られるほうがまだやりようがある。

だからといって諦めたわけではない。

八重が所属している魔術組織によつて彼に『えられた任務は、『異眼』系の能力者を捕縛すること。

今のところ、最有力候補は本多識織の『真理の明眼』。『真理』の名を冠するため、もつとも『源点』に近いとされている。

だが、それに近づくのは今のところ不可。

ならば セカンドプラン 第二計画を構築するまでだ。

そして、たほど労せず見つけることが出来た。

決行は、今夜。

信じるのは、己が操る式神からの情報のみ。

ひなどり園を訪れた識織の両手には、巨大なスーパーの袋四つ。ロゴは英語表記で『cheap market』。みんな大好きチープマークットのレジ袋だった。中身はもちろん、誰にでも当たり障りの無いような平凡なお菓子。

入った瞬間、「しきおりにーちやーん！」といぐらかの子供たちが駆け寄って来て、腰回りに抱きついてくる。

「識織さん、ですか？ 怪我してるじゃないですかー？」

識織の包帯だらけの姿を見て蒼白な顔になる藍華。ミイラ男張りの包帯の量。だが、子供たちには逆に好評のようだ、「しきおりにいちゃんカッケー！」とめっちゃ興奮している。

しかし、興奮している子供たちは良いとしても、目の前の藍華だけには、なにか理由でも話しておかないといけないだけだ。「しばし一考した後、

「自転車でガラスに突っ込んでしまって、体中ぼろぼろ。一、二日生死の狭間を彷徨つたんだ」

「……はう

「藍華さんー？」

まるで貧血でも起こしたかのように頭を押さえて崩れ落ちてしまつ藍華。彼女が地面へと倒れてしまふ寸前に、識織が抱きとめた。

その際、腕に抱えていた

「血、血……想像しただけで、はうう」

「……想像しただけでダメな人が、現実にいるとは」

今も腕の中でこめかみを押さえながら、「はうう」と呻いている藍華を希少生物を見るような目で眺めながら、女の子の身体つゝやつぱり柔らかいんだなー、とかふしだらなことを考える。

女性の直感は鋭い。

男が邪な気持ちを持つと、すぐに気が付く。

「……識織さん？」

「ん、んー。ん？」

「……おほん」

「はい」「めんなさいゆるしてくださいわー」

こきなり土下座を敢行する識織。地面に額をこすりつけながら、ごめんなさい」「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」と連呼し続ける。

まさかまさかと地面に落ちたレジ袋を体いつぱいに持ちながら、一人の少年が尋ねてくる。

「にじちゃん、それ、なにやってるの?」

「これはね、日本に伝わる最高最強の奥義。デゲザといつものだ」

「ドゲザ?」

「心を込めた、謝罪方法だよ」

「ふーん。だつたら、おのこしても、これすれば許してもらえるかな?」

「わちろん……はい、やうです、許されません」

「——一年で一番鋭い睨みを飛ばされた識織。熱せられたフグの身のよう体が縮んだような気がする。誰から飛ばされた睨みだとからは、言つまでもない」とだ。

「子供は純粹ですので、何でも信じちゃいます。なので、見せる背中は確かなものをお願いします」

「……あい」

声がか細くなつた。切ない気持で心が満たされる。

俺の背中は、確かじやない……。

何だか自然と笑みがこぼれる。もちろん、皿廻的な笑みだが。

「こいちらん」

「なにかな?」

両手両膝を地面につけて打ちひしがれている、レジ袋を持つた少年が話しかけてくる。

少年はそのレジ袋を一旦地面に置くと、親指を伸ばし、最大級のスマイルをこちらに向けながら、年相応の快活な声で言った。

「なんかいい」とあるつてー。」

全識織が泣いた。

主に情けなくて。

何が嬉しくて小学生に慰められないといけないといつのだ。それもいい年をした高校生が。まだ半分しか生きていかない子供に。

「へんつー。」

少年に叫ぶわけにもいかないので、とりあえず無限大の空に吼える。

まあ、それから子供たちがいつものようにお菓子を持って行って、藍華が、「ちやんと分けるのよー」と心配そうに見送る。

「やっぱ、まだ一か月も経ってないですけど、大丈夫なんですか?」

「えっとですね。藍華さん、この現代には様々な収入方法があります」

「まさか、『』と……『』

「違うわ! ? なんでもまさか? つていうかなんでそこまで至りちやつた! ? 臨時アルバイトですよ! ! 」

「えへへ、『めんなわこ』『めんなわこ』

可愛らしく片手を瞑つて、「許してください?」と顔の前で両手を合わせている。

可愛かつたので許した。

三十を超えた親父がしていたのなら、一度と云々か両手も未来永劫開く」とは無かつただろう。

「セウニヤ、イブちゃんは？」

「こつもどおり、ですね。私にもわからないような分厚い本と向かい合つてます……仕方がないのは、わかつてゐんですけど」

「よつしゃ待つてろイブちやあああああああああああああん……」

走つていつもの場所に行いつとした識織の背中に、少し大きめの声で言つた。

「あと、ちょうどだけですけど……ほんの少しさんですけど、いつもとは違つてます」

「違う？」

「……なんか、じつ、ブレているつていうか、静かなんですけど何かにじつと耐えてるみたいな感じがするんです。それで、できたら

「

力になつてあげてください、と、儂そつと笑みを零しながら言つた。

識織は振り向かず、そのままいつもの場所へと歩を進める。少し離れてから、藍華は自分にもあまり聞こえないほど小さな声で、呟く。

「 私には、できませんから」

いつもどおり、そして明白に彼女が埋もれて本を読んでいた。しかし、今回は埋もれていたのは人形ではなく、その場の空気。自分の創りだしている空気に埋もれてしまっている。

だだつ広い室内の日が射さないところにぽつんと椅子を置いて、そこにちょこんと座つて何かの本を読んでいる。

確かに、いつもとは違った。

いつもの彼女というのが物凄く曖昧なわけだが、それでも、偏った印象でそれを無理矢理平均するとしたら、彼女のいつもどこのは、それは鉄のようだと表現するべきなのだろう。

いや、打つても響かないのだから、空気のようだと表現すればよいのか。

とにかく、不变だ。

だが、それに違和感を感じる。

罇が入ったかのように、異物が混じったかのように。

「イブちゃん」

「……なんだ、キサマか」

「識識。名前呼ぼつ

といあえず、いつものよつた会話。

酣話なく終えた会話。

会話。

「今日も、綺麗事か？ 心配しなくとも、ボクは綺麗なままだ。誰にも穢されていないし、穢される予定もない。そんな未来は無い」

「 そうだね、綺麗事だ。…… イブちゃん、だから、君が隠している何かしら、全部綺麗に曝け出しちゃえよ」

識織は、じこまでも会話を続ける。

斎歩は分厚い本から顔を上げることせせりて、ページをめくらしながら識織の言つたことに答える。

「 生理が来た」

「 ぶほつー？」

思わず噴き出した。向かい合つて話していた斎歩の顔にも少々唾が飛び、嫌そうに払いのけながら、斎歩は無表情で言つ。

「 意外か？ ボクだつて十一だ。生理ぐらい来る」

「 だ、だからこそそれを言つ必须は」

「 キサマが言えと言つた。違うか口コロン」

「 口コロンは違ひナビ……」

恥じらいもせずに堂々と言つてのける。堂々といつのもまた表情には出していないし、ただの識織の感想だが。

「 隠し事は終了だ。わざわざ外に行つてガキ共と遊べばいい」

そう言えば、女の子は生理痛がどうやら妹が昔言っていたような気がしないでもない。そのときは適当に聞き流していたのだが、今、ああそつかと実感しているわけである。

識織はなんだかブリキ人形のようにかくかくなつてしまつた体を動かしながら、斎歩に背を向けて外へと出る。

これで、この殺伐とした雰囲気の原因も分かつたわけだ。藍華さんに赤飯でも頼めばいいかな？ とか思いながら、挙動不審でその場を去つた。

残された白い彼女は、ただ、味わいつゝページをめくる。

ペラ、ペラ。
ペラ、ペラ。

夕方。夕日といつのは、やつぱり人をノスタルジックな気分にさせる。その中で小さな子どもたちが声を上げて遊んでいるのを見ていふと、尚更。

「はははははははー！ いこちやん！」

「うひちだつておにこちやん！」

「ふぬぐべぐべぐべぐべぐべぐべーーー。」

その子どもたちの中で、一緒になつて本氣で遊んでいる高校生がいた。遊んでいるといつよりも、捕まえられなくて怒っているというか。

なんにせよ、本氣で遊べるといつのま、とても気持ちの良いものだつた。

「識織さん、今日もありがと「わざ」ました。ほら、みんなも」

「「「しきおりこじちゃんありがとーーー」」

「」の黄色い感謝の声も、最初はくすぐつたくなるものがあつたが、今では随分と慣れたものだと思つ。そつは言つても、まだまだ背筋がむず痒くなつたりするのだが。

夕日もほとんど沈み、少し不気味な青紫の空が広がつている。

今日も、これでお開き。

「そう言えども、お父さんとお母さんは仕事?」

「はー」

仕方の無いことだつた。

これだけの人数の子どもたちを養つためには、休んでいる暇などない。

だとしたら、十六歳。

大人ぶつっていても、実はこの時期、大人が恋しくなつてくれる。

「藍華さん、俺の胸にダイブしてもいいぜ？」

識織は、多分これ以上ない優しい笑顔を浮かべて、抱擁のポーズをとる。

藍華はくつろとした瞳を細め、怪しそうに一步下がる。

「……へ、変態」

「……あれ？」

どこかで何かを間違ってしまった識織は冷や汗を垂らしながら、藍華から一歩離れる。

そして、糸が切れたように震えていた藍華の身体が稼働する。自分の身体を軸にした左手の一撃は、乾いた音を上げて、日没を告げた。

冷たい空氣に左頬が悲鳴を上げる。ネックウォーマーの上からではよくわからないが、その下には綺麗な紅葉が張り付いているはずだ。

「うーん、あれだな。まさか変態だなんて言われるなんて。心外だ
ぜ」

俺は普通だ、と識織は苦笑いを浮かべながら原付バイクを走らせる。

辺りはすっかり帳が落ちて、心なしかいつも以上に人気が少なく感じる。

そこで気付けば、明日からゴールデンウィーク。別に今日から旅行先に出かけてもおかしくはない。

「旅行か。行つたことは、修学旅行だけか」

今までに二回。一学期中にある修学旅行も含めると、二回になるか。

いや、現在進行形で、自分は旅行中といつてなるのかもしれない。自分探しの旅、と言づ名の家出に。

閑静な住宅街に、原付のエンジン音だけが響く。少し沈んだ気分を戻す為に、識織はある八重といつ男について考えることにした。

(そう言えば、あれから襲撃が無いな。まさか、アイツ助けるついでにヤッちゃった?)

あり得る、十分にあり得る。

識織は、無残に切り刻まれた八重の身体を想像しながら身震いをした。

だが、それは無いだろ?といつ相反する予想も、同時に立つていた。

敵の駆除と、識織の命、一つを天秤にかけたときに、あの少女の中どちらに傾くかなんて、論ずる必要もないことだった。

論ずる必要もないことなので、せずに、自國を確認するためにスマートフォンを取り出すとポケットを探る。が、無い。

「あり? ありり?」

原付を一旦止めて、体中を探る。
だが無い。いくら探っても、無い物は無い。

「ありー？ 子どもたちと遊んでるときに落としたかったか？」

じゃあ、戻るかな、と。

識織は原付を反転させて、再度アクセルをかける。壊してくれるなよー、と戦々恐々と咳きながら同じ道を引き返していく。高かつたのだ。そして、唯一の通信手段を潰されたら、この後の識織の人生など真っ暗闇だ。主にバイト面で。

数分後。そう、たつた数分の道のりだった。時間だった。識織がヘルメットを脱ぎ、キーを抜いてエンジンを止めたとき、ソレは響き渡った。

「ぎやあああああああああああああああああああああああああああッ！？」

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ンツ！』

どちらも、聞いたことのある声。

そして、どちらも人外の声にしか、叫びにしか、聞こえなかつた。思わず『真理の明眼』を開眼させる。

どつと汗が噴き出るのが分かる。体中が痺れて、歩くのもままならなくなる。

それでも走つて、走つて走つて走つて走つて、自分が持てる最大限の力を込めて 叫んだ。

「藍華さんツ！…」

返事は、無かつた。

駆けこんだ先には

地獄が、広がっていた。

血。肉。骨。食い散らかされた子供。そう、食い散らかされた。
肉。血。骨。さつきまで遊んでいた子供。なれの果て。食事。餌。
空腹を満たす食物。生贊。あそこに散らばっているのは肉。子供だ
った肉。遊んでいた肉。子供。血みどろに沈んだ子供だった肉塊。
破裂したボール。大破した遊具。血肉を吸つた砂場。血肉骨血肉骨
血肉骨。

田の前で、首を食い千切られる、藍華の姿。

胴体と首。水気を含む音を上げて、乱雑に引き千切られた二つの

切り離されたそれは、いつものように、子犬のように駆け寄つてくることもなく、人懐っこい笑みを浮かべることもなく、子供たちの肉溜まりへと落下した。

『ガルルルルル』

唸り声を上げ、鋭い歯を晒す巨狼。

死。
その刃と歯の間に
無数の肉片
全員は血の跡

死を与えられた。
間接的他殺なんかじゃない。
直接的他殺だ。
殺人だ。

死んだ。上から下まで隈なくあちこち金で完璧にどこにも穴は無く万全に、万が一なんて言葉はどこにもなく、喰い尽くされた。

頬に、何かが伝つた。

その冷たい何かの名前は、思い出すことが出来なかつた。

突撃してくる巨狼。

識織はその顔面に向かつて、無感情にナイフを横薙ぎにして、白いモヤへと変質させた。

呻き声も、嗚咽も出なかつた。

風景がぼやける。

そのぼやけた視界の中に　この暗闇に墮ちた風景の中に、白い点がぽつりと落ちていた。

銀色の月明かりを浴びて、冷たい空氣に体を晒してゐる一人の少女が、屋上にいた。四階よりも、一つ上の屋上に。

現状にほとんど脳が追いついていないのもあつてか、その一拳手一投足に目が奪われて釘づけになつた。

だが、識織は、そのぼやけた風景しか捉えることしかできない『眼』で、たしかに、見た。

少女の紅い瞳から、瞳から　銀色の雲が頬を伝うのを見た。その瞳と、自分の紅い瞳がぶつかり合つた。

『先見の晴眼』

『お前に未来なんてないんだ』と、言われたといふ。その少女は、何を覗てしまつたのかと、識織は二つの田か考えていた。

未来を、この未来を覗ってしまった。

一年前から、一年前からこの時が来るのを、知つていたのか。未来はない、と言われた少女は、未来を覗た。最悪の未来を。自分では返ることが出来ないような未来を覗せられ、何の行動も起こせないままに、この日を迎えた。ただ、己の感情を殺すという作業をしながら。

そして少女は、泣いていた。

嗚咽も漏らさず、一人でこつそり、泣いていた。伽藍の洞なんか
じゃ、なかつた。

だけど、本多識織が見たかつたのは

ふと、
気がつく。

卷之三

た。力の渦巻きが目眩く同じ黒い暴力無数に衝突して

「あ、あ、ああ……」

識織は、まるで自分の意思ではなく糸で操られているかのようだ。

まだ、観線はぶつかり衝つたままだつた。

視線。紅い視線。

そして、少女が選んだのは、いや、もう何年も前から選んでいたであろうその選択は。

投身自殺、
だつた。

ゆづくりと傾いていく彼女の身体よりも速く、速く速く速く、
織は走った。

体に纏わりついていた糸を引き千切るかのように、体を振り乱しながら、識織は、一直線に走った。

そこに、その線上に、一頭の巨狼が。
だが、構わず走り続ける。

その体に巨狼が攻撃を仕掛けてきた。

「どけ、どけよー。どけえエエエエエエエエエエエエッ……」

壁のように連なる狼の身体をナイフで切り飛ばしながら、走る。
少女の身体が、宙に踊った。

まだ、まだ間に合ひ。まだ、まだ、まだまだーー！

だが、狼を切り裂くスピードよりも、小さな少女が落下していく
スピードの方が速い。

「停まれ、停まれエ！ 時間でも空間でも、なんでもいいから

停まって、くれよ……。

どしゃ。

無情にも、無様にも、神様は何の願いも叶えることなく。

小さな少女の身体は、地面へと激突し、白い身体から、真っ赤な
液体を溢れださせた。

第十七話・後悔

分厚いガラスの向こうで、幼い少女の身体が銀色のメスによつて切り開かれていく。慌ただしくも冷静に事を運ぼうとする医者達。懸命に、命を助けようとしていた。

全身麻酔を施されたその身体は、いくら切り裂かれようとほとんど反応を見せず、口と鼻を覆う人工呼吸器には荒い息で白い結露が出来ていた。

「親族の方ですか？」

「……ちが、う」

いつの間にか、緑色の施術衣を着ている医者の一人が接近していた。

壮年の医者は興奮を抑えるように荒い息で、分厚いガラスの向こう側を見つめている識織に話しかけた。

「違う？ では、親族の方はどうちらに？」

「あの子は、孤児なんだ。親族の連絡先なんて分からぬ……」

「では、孤児院の経営者は？」

「知らない、知らないんだ！？ 全部、全部全部全部、全部肉の塊

になつたッ！死んでたんだ！！

識織は分厚いガラスを殴りつける。が、罅などは全然入らず、激しい震動がガラス全体を震わせるだけだった。

医者は驚いたような表情を見せたが、もつて一度確認をとる。

「では、あなたが保護者とこいつと一緒にありますね？」

「……ああ」

「あの先天性白皮症の少女 程度は軽いようですが。なのでそのことによる被害は無いのですが」

「助かるのか？」

「助けてます」

視線をぶつけあう。

識織は瞼を閉じ 視線をガラスの向こうに引き返した。

「……任せる」

「はい」

そうして医者は、ガラスの向こう側へと行った。一つの命を助けるために。

識織はといふと、ただただ、ガラスの向こうを見るしかできないといふのには、俺が巻き込んだ。

絶対に、そうだつた。あのとき、八重継真といふ男を、少なくとも

も一度と行動不能にまで追い込むことが出来ていたのなら、こんなことにはならなかつた。

ようするに、全て識織の責任だつた。

全て、識織の油断が招いた事態である。

藍華が、肉片に変わつたのも。子供たちが、肉片に変わつたのも。

園木斎歩が、こんな瀕死になつたのも。

身体の端が痺れ、一気に血液が滞る感じがする。指先はどんどん冷えて、呼吸は荒くなり、やがて息を吸うのも難しくなつてくるような気がする。心臓が脈打つたびに、どくんどくんと跳ねるたびに、このまま止まつてしまつんじやないかと錯覚を憶える。

ひなどり園のみんなとの出会いは、それは、別に運命的なものではなかつた。ほとんど強引に、識織が彼らの生活に介入しただけだつた。

上京したばかりのひなどり園を見つけて、そこで笑つている子供たちの笑顔が本当に眩しくて、天邪鬼にも泣かせてみたいとか思つたりして、偶然を裝つてなんとなく出会つて。

一人の少女と出会つた。

それから、たつたの一年。

たつたの一年で何を築き上げたんだと聞かれれば、大したものはないなかつたと答えるしかないだらう。最終的に、識織の望むことは一つも叶つていなかつたのだから。

だけど、それは、かけがえのないものだつたに違ひなかつた。

いつも笑つっていた。
自分も笑つっていた。

それで 十分だつたんだ。

「これで、失つた後にこんなにも傷つくのは、一度田だつた。
どちらも、あって当たり前のものだつたがゆえに、失つた時は、
消え去つた後は、こうだつた。

識織は、ただじつとガラスの向こう側を見つめていた。
その眼は、開眼しているわけでもないのに、赤く、染まっていた。

休みの日の朝が、こんなにも氣だるい感じで訪れたのは一年ぶり
だつた。

田をこすりながら身体を起こすと、身体の節々が痛んだ。今まで
自分が寝ていたところを確認すると、どうやら病院のロビーのソフ
ア。身体を丸めて眠つていたせいだろう。

時計を見ると、四時三十分ほどを指していた。
ぱーっとする頭が、一気に覚醒する。

「 イブちゃんはー!？」

「 本多識織さんですね?」

声を上げて振り向いた先に、昨夜の壮年の医者が、マスクを外し
てそこに立つていた。

「イブちゃんは? イブちゃんは?」

「一命は取り留めました

身体を起こす為に支えていた腕の力ががくんと抜け落ちた。倒れ
た方向が壁で、頭を強く打ちつける。

痛みに涙目になりながら、しかしそこには違つ涙も混じつている
ような気がしてならない。

「しかし、まだ予断はできない状況です。今日の昼あたりが山場で
しょう」「

「……面会は、できますか？」

医者は少し悩み顔を俯かせた。その動作を追つ識織の瞳は、真剣そ
のもの。

ゆつくつと顔を上げた医者は、硬い表情で、言った。

「あまり刺激はしないでください。興奮して血行が良くなれば、そ
れだけで危険な状況ですので」

「分かりました。ありがとうございます」

「……たしか、ひなどり園でしたか。そこで、人のものと思われる
肉塊が山のようになつたそうです」

医者は、真剣な面持ちで言った。

あの惨状は、きっと、百年ほど前に起こつた天安門事件を想起
させるものがある。日本史の教科書にも載つてゐるその惨状は、ネ
ットではより眞実に差し迫つてゐる。

肉。人の肉だ。人の肉がミンチになつて、そこら辺に散らばつて
いる。

日本では、久しく無かつた。

「警察の見立てでは、チエーンソーのようなもので切り刻んだのか、
それとも自作の兵器でも使つたのか、検討中の様です。取り調べの

方も、お疲れさまでした

「……はい」

知らない一点張りだった。

いや、分からぬバリエーションも含めれば一点張りか。

自分とひなぞり園との関係は正直に話したが、それ以外はその一
点張り。

「では、これで」

「……ありがとうございました」

識織は去つていいく医者の背中に、深い礼をした。
彼が医者に出来るのは、ただ、それだけだった。

第十七話・後悔（後書き）

前回のが長かったので、小出しにしてみました。
ご感想、批判、指摘、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0981z/>

真理と俺。

2011年12月25日20時51分発行